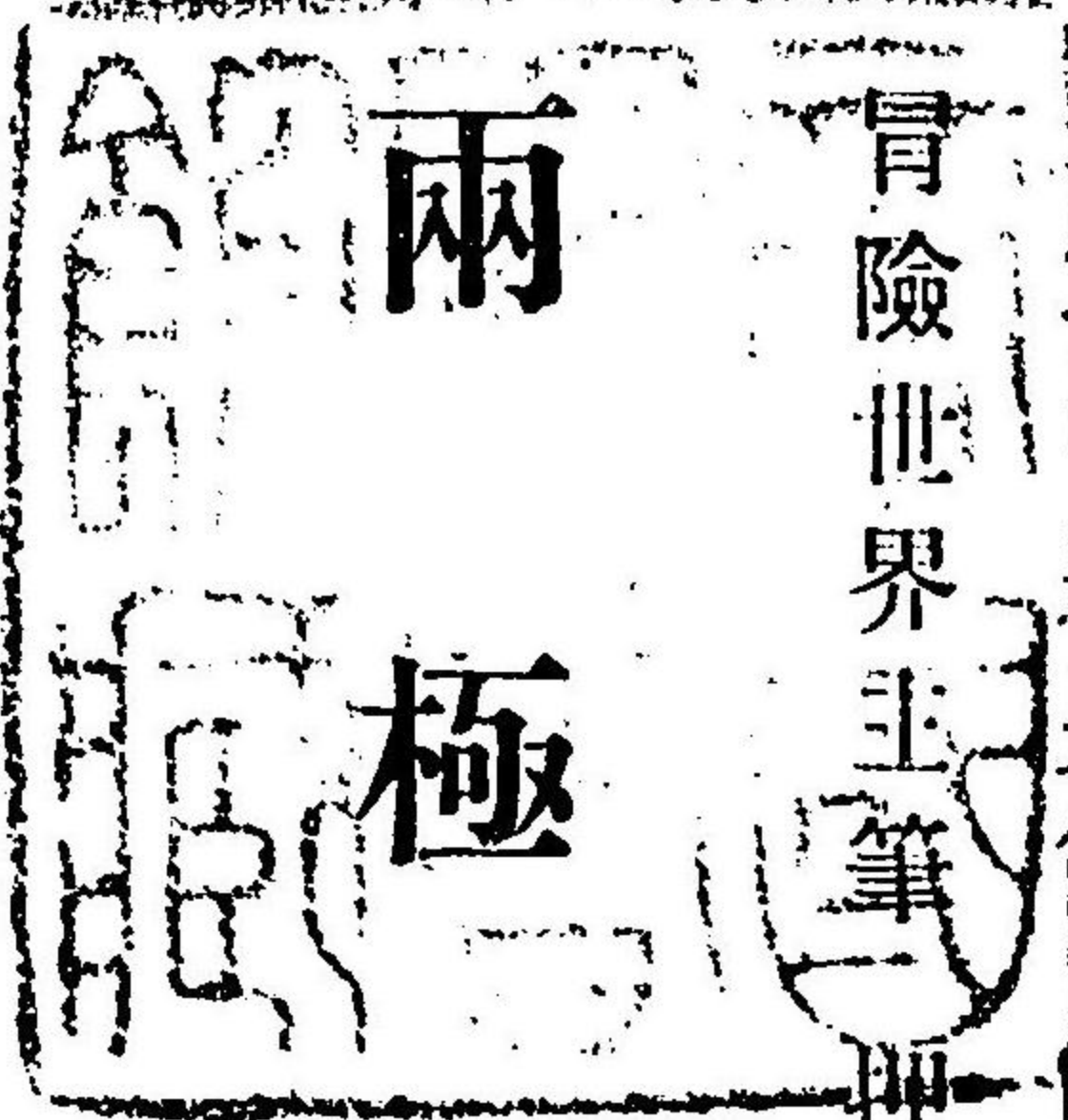


兩極探檢記



96-522



海軍中將男爵  
肝付兼行題字  
冒險世界主筆  
川春浪序文

探  
檢  
記

全

高橋淡水補  
吉川煙波著



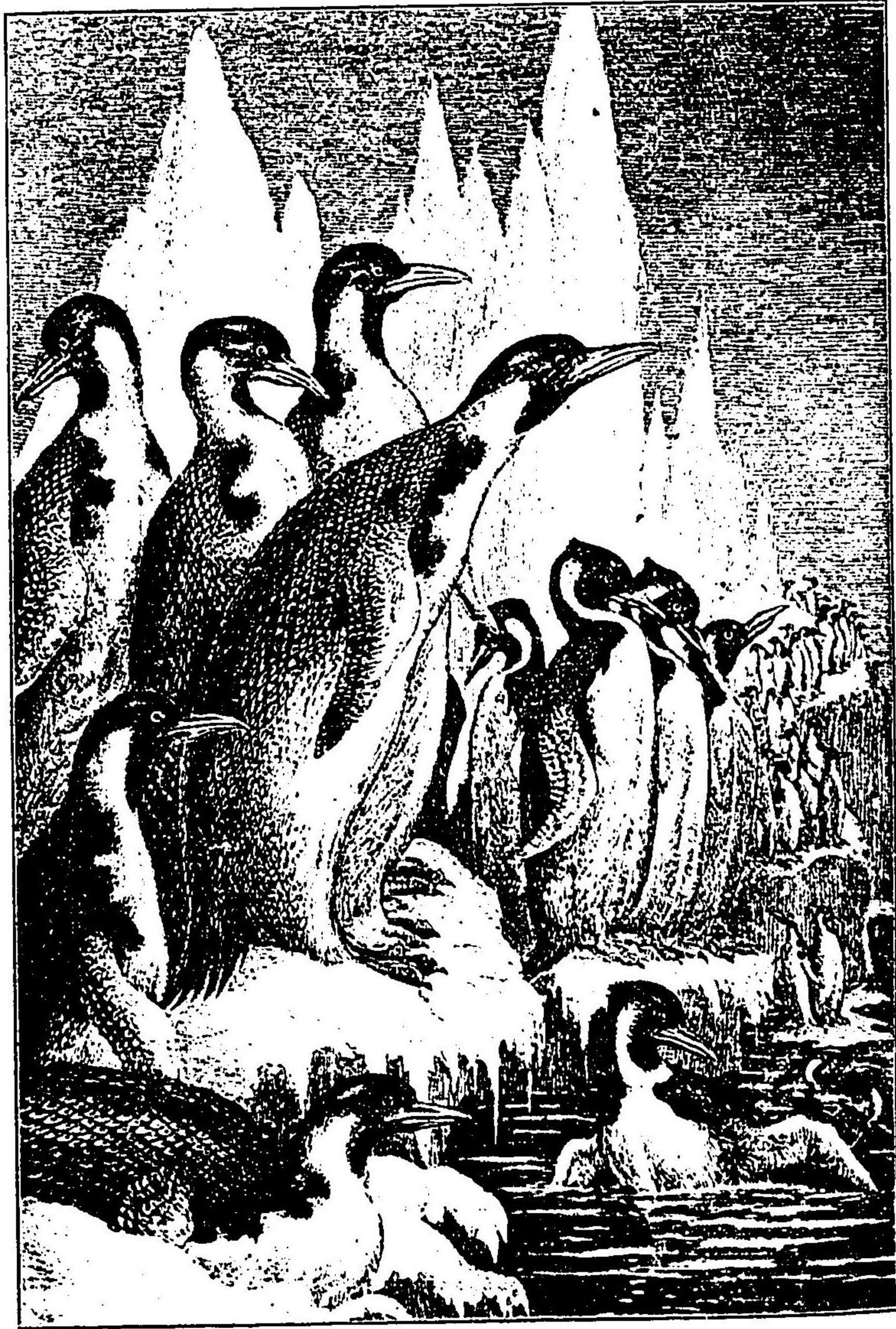
不問是真心  
本及有百折



纒有萬變不  
窮之妙用

假劍掃法  
極探檢記首  
庚戌歲旦  
兼行





鳥ンギンペの上氷極南

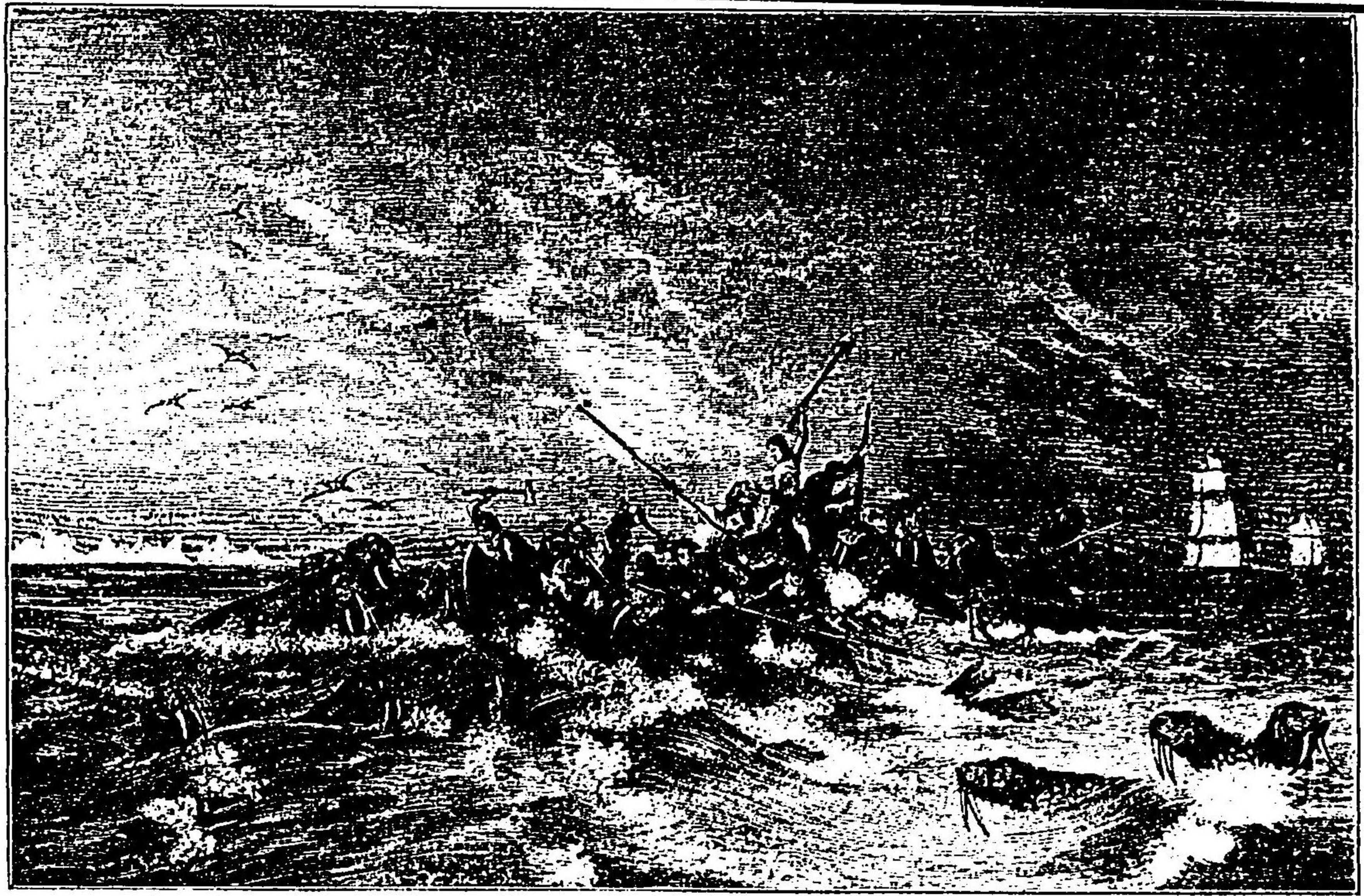


熊海の洲濠



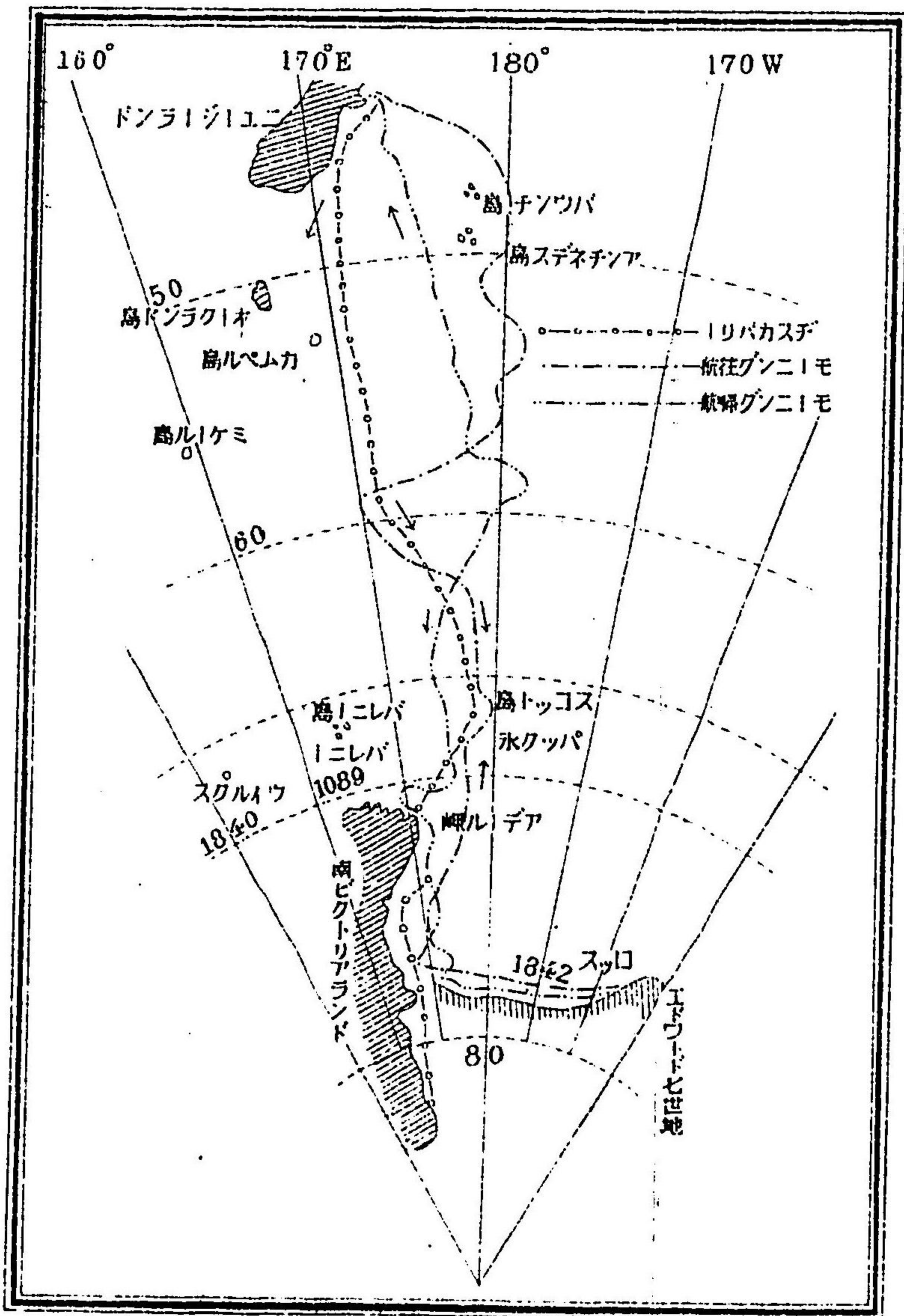
北極の橇行





海象の襲撃

圖二第



圖一第

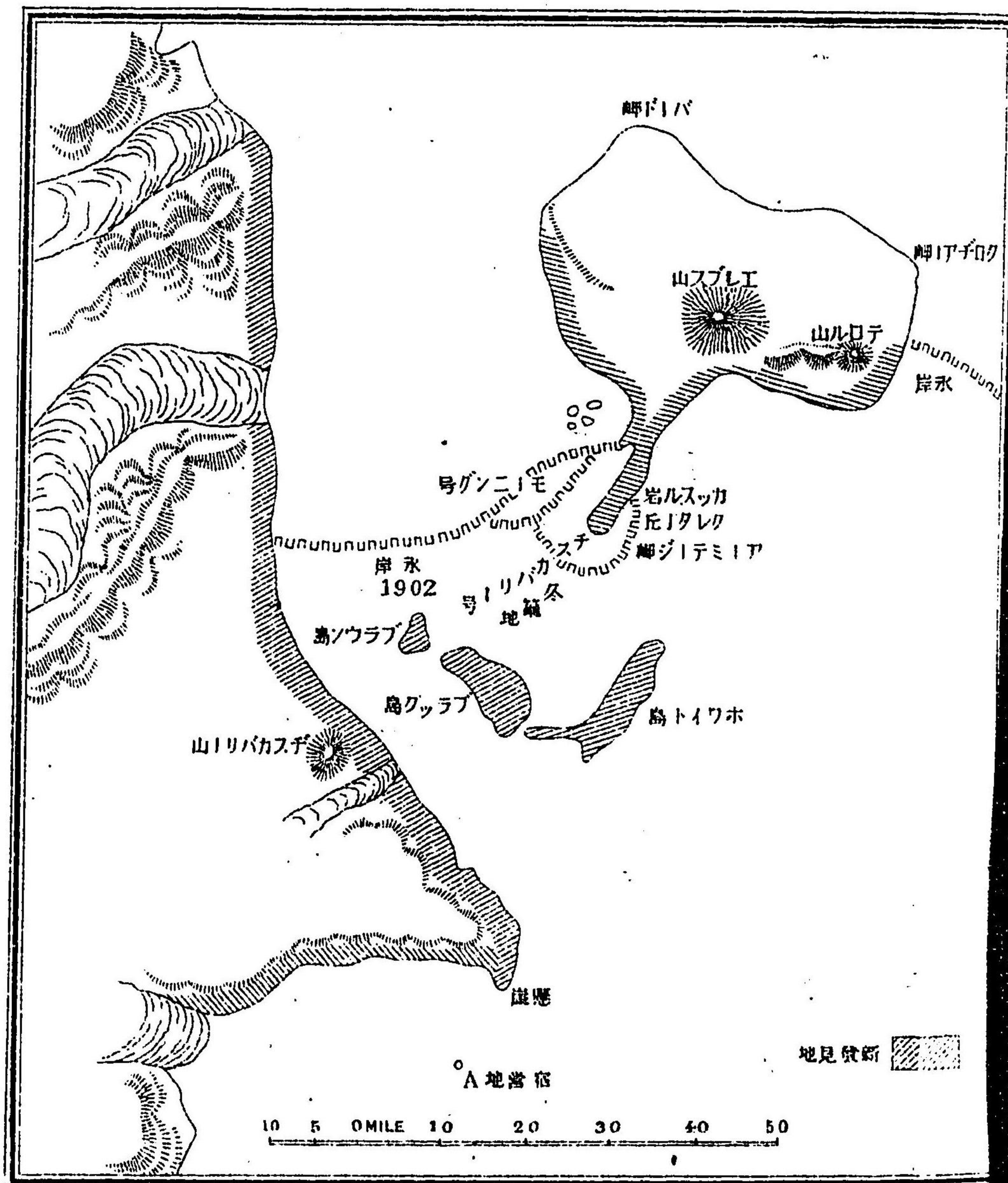


圖 四 第

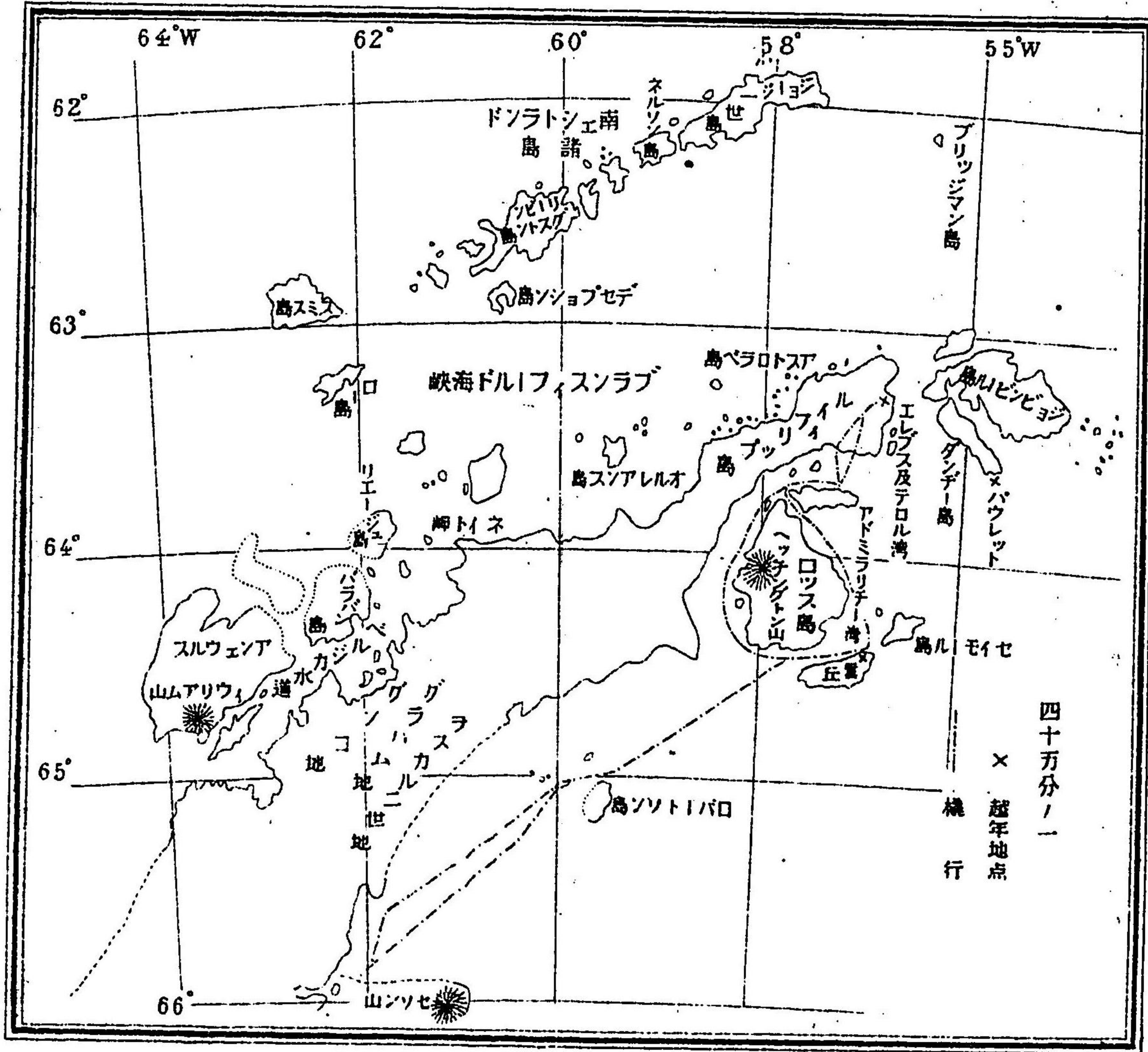
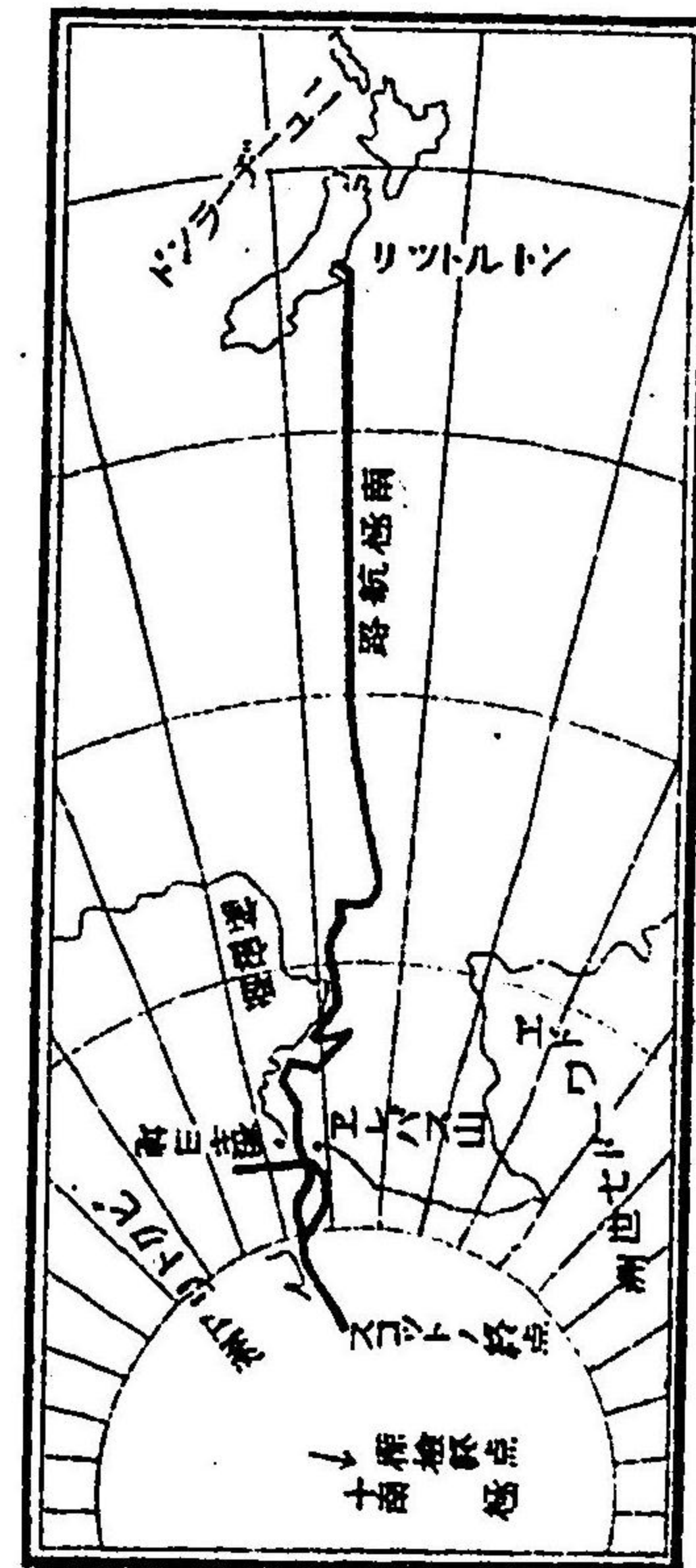


圖 三 第



## 序

際物にろくな物は殆んど無し、蓋し利に走るに急にして、何等の用意なく、何等の研究なく、徒らに書肆の奴隸となつて、出鱈目に筆を飛ばして讀者を瞞着せんとするが故也

白瀬中尉が將に南極に出發せんとする數日前、兩極探檢記出づ、江湖或は之を以て、世にありふれたるろくでもない際物と爲すものあらんも、本書の實質は然らず、著者及び補者は篤學謹嚴の士、夙に兩極探檢の世界的事業たり、人類的事業たり、又國家的事業たる事を知り、此偉業を爲す者の我が國民中にも出現せん事を望み、本書に筆を起せ

しは一年以前、歐米諸國人が南極及び北極を探検せし眞事蹟を研究するに苦心一方ならず、漸く其稿を脱せし時、恰も白瀬中尉の敢然として起つあり、偶然に似て偶然にあらず、何等かの天意の其間に存するに似たり、されば本書は世にありふれたる際物の類を以て目すべきにあらず、向上すべき國民、發展すべき國民の、必ず一讀すべき良物たるを信じて疑はざる也

明治四十三年八月七日

押川春浪

### 小序

本書の著者は今遠く北海に鯨群を追へり、其航に上るの前手を訪ひ、托するに本書の校補修正の事を以てす、されど、予や固と水産、氣象、海洋の諸學に於ては門外漢也、焉んぞ此書に向つて一字を加ふるを得むや

されど、著者は親友の令甥にして、情誼恰も骨肉の親に似たり、即ち著者の需に應じて、烏滸がましくも、術語の外行文の難達にして諸風解し難きものは、一々之を修正校補したり、或は角を矯めむと欲して却つて牛を殺すの點あらむ、之れ著者と讀者に向つて諒恕を請はむと欲する所也

殊に著者の此稿を了へたるは、實に昨年末にあるが故に、當時白瀬中尉の經歷事業は未だ今日の如く廣く世に知られず、著者の草案中絶つて此事ふし、然るに特に劈頭中尉の壯學を叙したるは、畢竟中尉今回の計畫は、實に世界的の雄圖にして、竊に其の人格と事業とを敬重するが故に、特に筆を中尉に起して、彼我の探検事業を比較して、我國探検事業の世界に於ける位置を示し、國民の自覺を促がし以て中尉壯學の後援を爲さむとするの意志に外ならず

明治四十三年七月麻阪水川に於て

淡水生識

### 例言

予は平生好みて探検冒險に關する紀事を愛讀し、内外の此種の刊行物に接する毎に、其の梗概を摘出し、之にシステムを立てて此書を編著し、名づけて兩極探検記と題す、書中收むる所の紀事は、何れも皆學術上の根據を有して信頼す可き内外諸家の報告研究に基くが故に、尙に眞實にして虚飾なき今世紀の探検史たるを確信せり、今や兩極の探検事業は世界の問題とあり、歐米諸國の探検家は孰も其の先鞭を著けむと欲して、或は北極に或は南極に探検を試み、物々たる壯心を鼓舞して、皆祖國の國旗を極風に翻さむ事に努力せり、此の一小編著幸に我國青年の探検思想を鼓吹するよすがとふるを得ば、予の願足れり

明治四十三年一月

吉川生識

目次

南極探検

大日本帝國

○白瀬中尉の壯舉……………一

極地の生活に關したる中尉——北極探検より南極探検に轉ず——新西蘭を経て根據地に至る——スコット大佐と孰れが先着けん——壯烈なる中尉一行の乗組員

白耳義國

○同國の南極探検……………九

同國探検隊の目的——地理學上の發見——ベルツツカ海峡沿岸の光景——一年間氣象觀測の結果——細く・天空に懸るシーラス——氷海に現はるゝ面白い現象——乗組員は憐むべし皆貧血症に懸つた——同國第二回の探検

## 獨逸國

### ○南極探檢船ガウス號

勇まじき船出と研究計畫——地理學界に貢獻せる結果——同號の大西洋面の海洋學調査——同號の未知大陸発見——白晷々の中に立てる一火山——猛烈なる吹雪の壯觀——氷塊破碎と其の融解——二個の大旋風帶區域に越す

## 英國

### ○ヂスカバリ號の探檢

氣絶する斗り大困難——兩船相互の連絡絶つ——中佐より大佐に進めらる——スコット氏の探檢報告

### ○スコット氏の新計畫

今回の計畫發表——科學的目的と探檢準備——探檢の動機

### ○シヤックルトン大尉の南極探檢

南極に存する大陸——南極未知の地域は狭めらる——ニムロド號の出發——極南の活火山に登攀——猛烈なる大吹雪——冬籠りの學術研究——糧食の埋藏に着手す——南極探檢隊の出發——糧食缺乏して歸途に就く——悲惨なる歸途の危険——第二隊以下の行動——第三隊の行動——第四隊の任務——大尉

## 目次

## 南極探檢

### 大日本帝國

#### ○白瀬中尉の壯舉

極地の生活に馴れたる中尉——北極探檢より南極探檢に轉ず——新西蘭を経て根據地に至る——スコット大佐と孰れが先鞭着けん——壯烈なる中尉一行の乗組員

### 白耳義國

#### ○同國の南極探檢

同國探檢隊の目的——地理學上の発見——ヘルツツカ海峽沿岸の光景——一年間氣象觀測の結果——細く天空に懸るシーラス——氷海に現はる、面白い現象——乗組員は憐むべし皆貧血症に懸つた——同國第二回の探檢



獨逸國

○南極探檢船ガウス號

勇ましき船出と研究計畫——地理學界に貢獻せる結果——同號の大西洋面の海洋學調査——同號の未知大陸発見——白皚々の中に立てる一火山——猛烈なる吹雪の壯觀——氷塊破碎と其の融解——二個の大旋風帶區域に越年

英國

○チスカバリ號の探檢

氣絶する斗り大困難——兩船相互の連絡絶ゆ——中佐より大佐に進めらる——スコット氏の探檢報告

○スコット氏の新計畫

今回の計畫發表——科學的目的と探檢準備——探檢の動機

○シヤックルトン大尉の南極探檢

南極に存する大陸——南極未知の地域は狭めらる——ニムロド號の出發——極南の活火山に登攀す——猛烈なる大吹雪——冬籠中の學術研究——糧食の埋藏に着手す——南極探檢隊の出發——糧食缺乏して歸途に就く——悲惨なる歸途の危険——第一隊以下の行動——第三隊の行動——第四隊の任務——大尉

の探檢より得たる功蹟——諸科學者の批評と破天荒の名譽——人間以上の力

蘇格蘭

○ブルース氏の探檢

○スコチア號探檢事業

スコチア號探檢事業第一回の報告——スコチア號探檢第二回の報告——マツスマン氏とブルース氏

瑞典國

○瑞典南極探檢船南極號

瑞典探檢隊の任務——南極號の活動——瑞典探檢隊救助の顛末——同探檢の結果——クラハム地の地宜

佛國

○佛國の南極探檢船

マヤルコ氏の探檢船——佛國南極探檢狀況

# 北極探検

## 英國

- 英國の北極探検史……………一〇七
- 北東航路の第一回——北極探検家フランクリン氏——バーレー氏の遠征——ロックス氏の北極再探検——英國以外の遠征——貴ぶ可き遠征——特筆す可き遠征——記し難す可き遠征——グレイ大尉の悲劇——北極探検年表

## 露西亞國

- トール男爵の探検……………一三二
- 曙號の氷中閉鎖——トール氏の行衛搜索隊——マンネット島探検
- カムチャツカ探検……………一三九
- 露國の北極探検誌

## 米 國

- ペアリー氏の北極探検……………一四二
- 探検の報告——滑稽なる土人の舟の消方——ウアル海峡に北航す——杳として消息なかりし少佐の消息五個の分隊——恐る可きリード——運命を天に任かす——氷山の頂に米國旗を樹つ
- ペアリー氏北極発見の報……………一四六
- 北極に突進せる少佐——極地に翻へる星章旗
- ジエグレル氏北極探検……………一六七
- ミツケルセン氏探検……………一七〇
- ペットフォードの命名——ペットフォード號遂に離破す
- ウエルマン氏の飛行器探検……………一七四
- 空中飛行器探検
- クツク氏の北極発見……………一七九

探検に従事したる由來——岩を貫く決心——中途に歸る者——一行病覺に覆はる——北極に昇る旗

○アムンドセン氏北磁極探検隊……………一八八

### 丁 抹 國

○エリヒセン氏探検隊……………一九三

エリヒセン氏探検結果——エリヒセン氏の末路——附ツヤンセン氏の漁場發見

### 白 耳 義 國

○北極洋に於けるオルレアン公の巡航探検隊……………二〇〇

綠州東海岸探検の結果——附飛行船探検

## 目 次 終

# 兩 極 探 檢 記

高 橋 淡 水 補  
吉 川 煙 波 著

## 南 極 探 檢

記せよ！、明治四十三年七月五日！

此日は實に日本に於ける世界的探檢の先鞭者白瀬中尉が、其の多年抱持する南極探檢の雄志を社會に發表すべく、東京神田錦輝館に於て其の發表の會を開いた日である。

中尉の擧を賛する者、政治家としては大隈伯、文豪としては三宅博士、海軍々人としては肝付將軍、其他多士雲の如く集りて、各々熱烈の辨を揮つて中尉一行

### 南 極 探 檢

南極探検  
 の行を壯にした、雲霞の如く簇がる聴衆は、拍手喝采、中尉探検の計畫を賛し  
 萬歳場裡に所謂南極探検發表會なるもの、式を了へた。

眞に之れレコードを破れる近時壯快の舉として、吾人も亦壯絶快絶を叫ばざるを得ない、されど、中尉の舉は固より献身的の事業で投機的の事業でない、中尉が渾身の熱誠を献げて世界探検事業の爲めに、邦人の未だ着手せざる海豹吼ゆる極南の氷海に、同志と共に探検を試むるの困難は蓋し尋常一様の事でない、従つて、中尉の舉を賛し、中尉の前途を思ひ、我國探検事業の發達を圖らむと欲する者は、單にお祭騒的に歡呼したのみでは何の用を爲さない、少くも世界に於ける探検事業の狀態を知悉して、中尉一行の壯圖に向つて應分の貢獻をしなければならぬ、吾人は茲に先づ中尉の探検事業を叙説して、徐ろに世界に於ける南極探検の實狀を叙説しやうと思ふ。

## 大日本帝國

### ○白瀬中尉の壯舉

古代史に現はる、日本人は海國男兒として、所謂海に生まれて海に死する底の覺悟があつた、浦島太郎の物語、さては、桃太郎の鬼界ヶ島征伐の如き、由來海國男兒の本領を表はしたもので、今尙童話に名残を留めて、海國男兒の面影を忍ばせる、然るに徳川時代鎖國政略は大艦の製造を禁止して、復た國民をして海洋に雄飛せしむる能はざらしめた、明治に入りて海軍の發展、商船事業の進歩、水産業の發展に伴つて國民の海事思想は、稍々昔日の面目を改めたが、今尙板子一枚下は地獄と云へる感想は消えてゐないのである、従つて探検事業の如きも比較的發達してゐない、此時に當つて先鞭を着けたものは、吾人が題目とする白瀬中

白瀬中尉の壯舉

白瀬中尉の壯舉

尉である。吾人は中尉の過去に就いて多くを知らない、されど、茲に中尉の略歴を紹介すれば、中尉は秋田縣金浦の出身で、其の十八歳の時、教導團に入つて見習士官に成つて、陸軍戸山學校より士官學校に轉じて、明治三十年を以て少尉となつて、其の第一師團にゐた頃、武官結婚條例の改正を兵事新聞に載せた爲め、上長官の怒に觸れて辭職後備に編入されて、中尉の軍隊生活は茲に一段落を告げた尙東京朝日新聞の報する處を抄出すれば左の如し

○極地の生活に馴れたる中尉

爾來中尉は北極探検の志を起し、有志を集めて函館に航して諸般の計畫をしてゐる中に、一時世の視聽を驚かした郡司大尉の統率してゐた千島探検隊が、難破の爲めに一時函館に來てゐたので、中尉は郡司大尉の一行と共に千島に往つて

白瀬中尉の壯舉

茲に越年した事がある。其後中尉は嘗て兒玉將軍を訪ふて、北極探検の必要を説いた事があるが、將軍は中尉に向つて、今は其の時機でないから、先づ寒氣に其身を鍛鍊して後日の準備をして置くが善いと云ふ勸告を試みた、そこで中尉は明治三十三年自令海峡を航つて、エスキモー土人の部落に到り探検に従事し、熊を屠つて其肉を啖ひ、極地の氷雪と戦ひ、鍛鍊熟磨、明治卅五年を以て歸來し、再び兒玉將軍の門を叩いて、遂に將軍の贊助を得て着々其歩を進めむとする折柄、恰も日露戦役が起つたので、氏は召集されて滿州の野に轉戦する事と成つた、氏の中尉に任せられたのは當時の事である。

○北極より南極に轉ず

凱旋後兒玉將軍逝き、米のベアリー一度北極を究むるの壯舉を演じたので、中

白瀬中尉の壯舉

尉は茲に北極探検を断念して、前人の未だ踏まざる南極探検に志向を轉じたのである。中尉は平生酒を飲まず、煙草を喫せず、菓子を食べず、如何なる烈寒の時と雖も火器を座右に用ゐず、殊に冷水を飲むで食物は冷却せるものゝみを用ゐて其の身体強健從來藥餌を口にした事がないと云ふ程である、加ふるに、輜重中尉なれば糧食の運搬、馬の使用に熟達すると云へば、探検家とし亦實に絶好の資格を有してゐる事は新しく言ふまでもない。

○新蘭を経て根據地に至る

中尉の一度探検を發表するや、加盟申込者百餘名、中尉は此中より八名を選抜し、之に天文地質の學者一人宛を加へて、都合十名の探検隊を組織して、八月中に二百噸の北洋漁業帆船に汽罐を添へて、品川より八丈島、小笠原島を経て新蘭に赴き、『マクムルドー』灣に至る計畫で、一日平均八十哩、九十日にし

て灣口に到着する見込である。

此の『マクムルドー』灣こそ中尉一行の根據地で、此の根據地で船を去つて、約六日間滞在して準備を終へたる後、愈々氷上の探検旅行の途に上る筈である、而して此際中尉は一行を二隊に分ち、中尉は助手二名と天文地質の學者と共に、五頭の馬に食糧を運搬させて、極地に向ひ、他の一隊は探検隊が歸路に要する糧食を、要所々に運ぶ任務である。

○孰れか先鞭？

かくて、中尉の探検隊は本年六月出發したる、彼の英國のスコット大佐の南極探検隊に先むじて、日章旗を彼の東、西、南の方位は全く消滅して、磁石は正確に直立して只北を指し、幾千年の昔から幾百千人の野心を起さしめたる極南に滞在し、三日間此の幽寂の極地に止まつて、氷雪を掘つて紀念の鐵篋を埋め、日

白瀬中尉の壯舉

白瀬中尉の壯舉

章旗を翻へして、附近の探検を行ひ、明治四十四年二月一日南極を發して、四月一日根據地に歸り、東京に到着するは、同年七月末の豫定である、其の詳細なる學術上の探検は、更に他日を期すると云ふ事である。

○壯烈なる乗組員

中尉の陸上探検隊十人の外、乗組船員は十五名で、何れも皆一騎當千の人物、殊に船長野村直吉氏は青森市出身の人物で、約十年間近海遠洋の海上生活を營み、水夫長運轉士より甲種船長に累進した熟練の實験家で、自から進んで中尉の志を助けたので、其の人物伎倆は秀島海軍大佐の推奨する處である、其の探検の準備設計の如きは、極めて質實輕便を主としてゐるので、費用の如きも往復約四萬餘圓に過ぎないのである、吾人は此の熱誠なる探検家の健勝に其目的を達して無事歸朝を祈るものである、行を送つて中尉一行の萬歳を連呼せざるを得ない。

白耳義國

○白耳義國の南極探検

白耳義國海軍大尉ド、ゲルラーシユ氏は政府及び有志者の補助を得て、我が明治三十年八月ベルジカ號に乗じて南極探検に發航し、同三十二年三月第一回探検を終りて歸航し、同年六月再度の探検を企て、南米ボリヰア國のラ、ブラタ港を解纜した、其の探検の結果は如何、今同探検隊中の一人たる博物學者が親しく執筆したる所を見るに、地球表面の各部は未だ研究を遂げざる地が多い、南極大陸の如きも亦其一にして、此の廣濶なる地域に關する智識は極めて零碎なるも此の區域は重要ならざる一大陸として看過すべきものでないと云つて居る。

○同探検隊の目的

白耳義國の南極探検

## 白耳義國の南極探検

即ち空氣の循環、大洋に於ける海水の循環、生物の地理學分布等に關する學説は、吾人智識の進歩に關聯するものである、南極探検の目的の如きは、今日に於ては科學的でなければならぬ、而して地域は深く高緯度の地に南進せんよりは寧ろ科學上の智識に資する材料を齎し歸る必要を認め居るのである、同探検隊の發企人にして又組織者となり、自ら探検隊の主任となりたるアドリアン、ド、ゲルラーシエ氏は、此の方針に基いて探検隊の組織並に其準備をしたのである、故に僅少なる經費の大部分を以て科學的器具購求の資に充て、水誌學、製圖學、磁氣學、氣象學、海洋學、地質學、動物學、人類學及び觀測、寫眞、醫術等専門の學者を求めて探検中精細なる科學的觀測の事を委任して、此の探検により携へ歸りたる材料は、各科學を通じて其數許多であつた、而して之等に關する研究の大要を擧ぐれば先づ左の如し。

## ○地理學上の發見

地理學上の發見は主としてダルカ、ガルウキツ群島中に存在せるブランドスフィルド海峡の南方と西方とにあるので、即ち從來の智識に據れば、此の地方には一大陸一海湾を隔て東方にまた一陸ある事を探知してゐたのである、即ち明治廿五年にラルセン氏はルイ、ヒリツプ地の南方に於て、太平洋と太平洋とを連續せる廣大なる通路を發見し、從來大陸と思はれてゐたツリニテイ地は、地理學者界に於て俄かに一島嶼と認めらるゝに至つた、又明治六年にダルマン氏は太平洋の方面に於てビスマーク海峡の通路を發見し、此に於て地圖上にヒューゲス海峡は一方に此の通路を開く事となり、又一方にラルセン氏が以前に發見した事實に従ふ事と成つた、然るに白耳義南極探検隊は明かに前述の事實は全く正確ならざるを認め、即ちバルメール地は小島より成れる一大群島でヒューゲス灣は大海峽の

## 白耳義國の南極探検



## 白耳義國の南極探検

入口たるに過ぎないで、フランススライールド海峡によりて太平洋と相交通して居る水道の方向は北東より南西に亘り、此の海峡の太平洋方面の入口をば、ベルジッカ海峡と命名したが、其の位置はビスマーク海峡の入口とちがつて、ダルマン氏が曾て實測した位置と比較すると、彼は尙其の南方にあるやうだ、されどダルマン氏の測定は誤なので、ビスマーク海峡とベルジッカ海峡とは全く同一海峡たる事は判明した、ツリニテイと稱せられてあるは、一大陸の一岬角たるに過ぎない事と成つた、此の一大陸は今回ダンコ地と名づけて、ベルジッカ海峡の東側にあるグラハム地の一部に過ぎないから、大西洋と太平洋と相通する水道の存在せると云ふ事は根も葉もない説と成つて仕舞つた。

## ○ベルジッカ海峡沿岸の光景

ベルジッカ海峡の沿岸は、険しい山地で、勾配急にして、狭窄しい谿が多い、其

の群島中で最も高い處は高さ二千米突餘、又此の山麓中の諸水道の中央部は頗る深く、諸々の谿谷は皆海水の浸入を被つて、古期の花崗石、肉綠岩、サイエナイト等より成り立つて、只僅に海峡の太平洋方面の入口に於て片麻岩を見る計である、一月中旬から二月上旬に懸けて、同地方に滞在中、海峡に結氷せず僅に二三の氷山が漂流するを見た計り、且つ小島嶼は一部分のみ氷を以て覆はるゝに過ぎないが、稍々大なる島地やダンコ地は全面大氷皮に包まれてゐた、内地に於ては到る處の山側に氷河懸り、溪谷に至りては一面氷流が海に注いで、隙壁の峻崖を成せる所僅に地皮を露出してゐる計りだ、此の地域では恒雪線は海面と一致してゐる趣きがある。

氷堆石を研究しては現時は氷河の収縮時代にある事を證明し得られた、即ち氷河が曾つて現時より擴張してゐた事を證明すべき形跡がある、其の殘留せる堆石

## 白耳義國の南極探検

を検すると、同地方に固有の岩石類よりも遙かに多種類に富み、且つ多少變質せる水成岩にも遭遇する事が出来た、又ベルジカ海峡の太平洋方面に於ける入口で探検隊は廣大なグラハム地とアレクサンドラ地とを再び望見した。

其他主要なる地理學上の發見は、西經七十五度より百〇三度と南緯七十二度三十五分との中間にある海底の大陸的臺源である、此の海中臺源は南に進むに従つて漸次に高まり、其の東部に於て北方に折れ、アレクサンドラ地、グラハム地等の海中臺源に接続して居るやうだ、又西方に於ては曾てロス氏がヅキクトリヤ地東方に於て發見した海中臺源とも連續してゐると思はれる、故に同地方の海中臺源は、西經五十度より東經六十度に擴がつて連亘するものとなる。

以上の事實に徴すれば今回ベルジカ號の發見は、彼の南極大陸の臆説としては有力なもので、臆説ながらも其の證左となる多くの事實がある、一例を挙げれば、

海中臺源と其の附近地方の沈澱物が汀成層なる事である、而して此沈澱物は灰白泥土の外に、尙ほ極めて多量な砂礫や數多圓形の岩片を混じて居る、此の圓形を帯びたる岩石は波浪の爲めに翻弄せられて其の稜角を失つたもので、原と一の海岸州帯の一部を成せるは疑なく、かつ其の岩片を運搬せるは一に六河の作用によると判斷された。

## ○一年間の氣象觀測の結果

從來吾人が南極地方の氣候に就いて得た唯一材料は、僅に夏期三ヶ月間に於てなせる頗る不完全な觀測のみである、一年を通じて觀測を試みたのは此の白耳義南極探検隊が始めである、即ちベルジカ號が南緯七十度と七十二度半、西經八十五度と百〇三度との間に於て、流水に圍まれつゝ越年した時に觀測したものである、即ち其の船体は氷に閉ざれない水面に接して居たから、其の調査した氣候は

白耳義國の南極探検

白耳義國の南極探検

海洋性の氣候で、一方では海洋の爲めに他方では永久的氷山を以て覆はれた南極大陸の影響を蒙つたことは勿論である、而して観測結果の大体は、九月に於て観測した最低氣温は氷點下攝氏四十三度で、最高氣温は二月に於て僅に二度を示した、而して一年中最も寒い月は七月で其の平均温度は氷點下十七度八で、平均温度の最高なるは二月で氷點下一度である、彼のスピッツベルゲンの北緯八十度邊は夏の平均氷點下一度五である。

斯く南極の比較的寒冷なのは、北方に陸地なく、氷野を以て全地を蔽ふ南極大陸が横はつてゐるからであらう、此の疑問は今回の探検観測の結果によりて確する事が出来た、それは北風の襲ふ毎に氣温は昇り冬期と雖も零度以上なる事がある、されど之れより昇る事はない、若し風が南に向ふと寒暖計は忽ち下降する、之れは畢竟南極大陸の内地には『寒極』があつて、其の地點の氣温は北半球の寒極

よりも一層酷烈なる爲めと思はれる、之れ南極大陸の凍氷地面積は、綠州、北部西比利亞、或は亞米利加の北部等に於ける凍氷地域の總面積よりも、遙かに廣大なるからである。

○細く天空に懸るシーラス

ベルジカ號が探検した區域は、旋風地帯であつたが、空中の濕氣は直に霧に化し、一年中約八ヶ月餘の降雪と十回の濃霧とに逢つて、殆んど天日を仰ぐ事が出来ない、偶々天の一方僅かに晴るゝ時は、細く日光を洩して繊細な卷雲が高く天空に懸るを見る事がある、しかし此の観測の結果は、固より同地方の各所に同じて適用する事は出来ないと共に、全南極悉く斯る氣候に支配されてゐると結論するも亦早計である、『南極大陸』の内地に侵入すると、晴天に富み濕氣もあると思はれる、ベルジカ號は海岸帯で氷山に閉鎖されたから、北方の渺茫たる海洋よ

自耳義國の南極探検

白耳國の南極探検

り来た濕氣の凝結せんとする地帯に停まつて、陸風は此の濕氣を拂ひ爲めに乾燥せる空氣を吸ふ事が出来た。

○氷塊に現はるゝ面白い現象

氷塊は北極のそれと同じく、海水の凝結によりて生ずる現象は、其の始め甚だ薄き層を作り、此薄き氷層は其の表面に堆積する降雪と壓力の爲めに壓搾せらるゝとによりて、次第に其層を増加するものである、ベルジカ號が探検した地方では、風の爲めに氷塊に壓力を生じた、例へば夏期天候の穩かな時は、常に流水に『弛み』を生じて、罅裂並に水道の生ずる事がある、之れに次て壓力を生ずるしかし此の現象は風が吹き始むる少しく前に起つて、其風やみ流水の漂游し始めた後暫時で止むを常とする、要するにこの壓力は流水の各局部が漂流速度の等しくない所から起る現象で、且つ其の速度の速いのは、風が吹初めて流水の一局

部に吹懸るも、他の部分は其の影響を受けないからである、此外流水が風の爲めに陸に向つて押し流さるゝ時にも壓力を生ずるは勿論である、探検隊の出會つた氷山は疑も無く陸地氷河の破片で、此の氷山の構造に就いて探知した特性は、ベルジカ海峽にある氷河の端面の構造に就いて觀察した者と同様であつた。

○此の極地に分布する動植物

ベルジカ海峽の兩岸は、厚き氷層にて地皮を蔽ひ、只僅かに二三の小島に於て狭長な砂濱並に絶崖に岩石の露出してゐる計で、此の南極地方の一小區域は植物の發育し得べき地で、苔蘚類、羊齒類、淡水性の藻類、硅藻類の繁殖せるを認め、陸棲動物は發育不完全なる翅を有する双翅類にて代表せられ、トビムシ類は頗る多く、其他線蟲類、車蟲、根足類等顕微鏡的動物群の發育を認めた、是等は現今南極地方の動植物を代表せるもので、其他には陸地の生物は此の真正南極地

白耳國の南極探検

白耳義國の南極探検

方の全區域に於いて未だ發見しない、又幾多の鳥類と膾炙獸とは此の地方に棲息してゐるが、之れを以て同地方に於ける陸棲動物と認むる事は出来ない、鳥類は主にベルジカ海峽に於て目撃せられ、多くは峭壁の罅裂洞穴等に栖むで居る、又海雀、鴨類は流水上に於て常に見受け、脂肪の厚い膾炙獸もベルジカ海峽に於て觀られ、鯨類も亦群をなして游泳せるを認め、隊員が十三ヶ月間流水に閉ぢ込められた間に、生物學的事實として第一に觀察したのは、硅藻類が海洋の表面は勿論、氷山の側面海中の小孔に至るまで到る處に存在する事であつた。

○乗組員は皆貧血症に罹つた

寒氣の人類に及ぼす影響を見るに、氷點下三十度乃至四十度の氣温で、天氣の穏かな時には、人体には頗る爽快を感じたが風ある時は其の反對であつた、隊員の考へでは、旅人が流水上で寒氣の爲めに不便を感じるのは、畢竟皮膚の表面

に水蒸氣の凝結を來すからである、即ち少時で衣服は悉く濕り再び乾燥する事が困難である、されど極地方に滞在する最大困難は、冬期間日光を見られない事で、今回の探検中でも明治三十一年の冬期中に、日光不足の人類に及ぼす影響を確認した、即ちベルジカ號乗組員は悉く皆貧血症に屬する病狀を現出した。

○同國第二回の探検

白耳義國南極探検船派遣計畫に就き、ヘンリー、アルクトウスキー氏は、明治四十年五月ブルワセン科學院に於て、同探検に關する意見を朗讀し、且つ計畫意見書を世に公にした、こは白耳義國探検船ベルジカ號、並に、英國探検船ヂスカバリー號の探検した區域内の未檢地に向つて、探検を試みんとする爲めである、此の地方はエドワード七世地その西端となり、ベルジカ號及びブークの到着した地點を東端として居るもので、若し十月初旬出發し得るものと假定すれば、氷

白耳義國の南極探検

## 白耳義國の南極探検

中を六七ヶ月間航行してエドワード七世地に進み、此處で冬籠の場所を撰び、該露營地を中心として、春季を待つて更に自働機を使ひ、南方に向ひ海岸延長部を研究して、ロシアの氷壁に依つて北限された廣大な氷河に關する問題を解決せんとする者である、されど斯の如き重大な計畫を遂げんには、探検日月の懸る事、夏期は三探検冬期は二探検を要する、此の探検隊は二ヶ年以内に出發する筈で、各種の調査に取り懸つてゐた、ア氏の計畫に就いて、政府は其の希望を漏らし専門家の協力を得て、此の平和的侵略を實行することを約し、ブルセン、アンツェルス等の市役所も亦賛成し、地位ある商業家及び工業家等は、此の事業に對し争ふて應分の寄附をなさんとして居た、著者は其後の消息を知る機會を有しないが、兎に角、此の國は海岸線甚短く、極めて海事思想に乏しい國民であるが、近來上下一般に此の事業に心を用ひ、先きなるベルジカ號の南極探検に尋いて、今又此

の計畫あるは近き將來に有數の海國となる兆であらう。

## 獨逸國

## ◎獨逸南極探検船ガウス號

今世紀の初英獨聯合南極探検に使用する爲めに、特別の注意で建造した英船は明治三十四年三月蘇格蘭のダンデに於て、獨逸は同年四月キールに於て、何れも進水式を擧げた、前者はマークム夫人が彼のクーク氏の世界週航によりて、英國の航海史上に名を残した、ヂスカバリー號の名を繼承し、後者は獨逸皇帝よりガウス號と命名された、蓋し有名な學者の名に因むたもので、兩者共に南極探検に緣故の淺くない名である。

兩者共に桎材木製で、外板はグリーンハート、ピツチピンを以て三重に保護し

獨逸南極探検船ガウス號

獨逸南極探検船ガウス號  
頗る堅固に構造せられ、結氷を破碎するの装置をなし、又船中には成るべく鐵材を避け、代ふるに銅材を以てし、磁氣觀測に誤差の生ずるを防がん事を勉めた、船内には皆電燈を點じ船室を暖むるに、ガウス號は熱湯管を用ひチスカバリー號は暖爐を用ひて居る、要するに此の二船は彼の時化多き南極の海洋に使用するの目的なれば、ナンセン、コリン、アーチエル兩氏の注意によつて、極地旅行の準備に無比の大改良を施したと云ふ事だ。

○勇ましき船出と研究計畫

ガウス號には三年間の薪炭食料を貯藏すべき準備、五名の學者五名の船員二十名の水夫を容るべき起臥室と研究室との設備があつて、其の速力は七哩、かくて同號はケルグエレン島へ極地産の犬五十匹を輸送すべく、明治卅四年八月本國を出發し、探検隊の主任エリツヒ、フオン、ドリガルスキー氏は自ら地文學を擔

當し、其他數名の學者を伴つて、動植物、醫學、地質學、磁氣並に氣象學等の研究に従事した、而して其の探検航路の豫定は、海洋學、地質學、磁氣研究等の成功を奏するに便なる線路を撰定し、ケルグエレン島を以て探検の起點として南極地方へ進行し、同島よりへ約九十度の經線にまで進み、其の航路にて從來不足せる深度鐘測を完了し、それより存否不明なるターミ、ネーション島の近海を南進し、更にビクトリヤ地の發見に赴き、成るべく此地とケンブストエンデルバイ地とを連續せるや否やを確め、それより南極大陸の沿岸を廻はり、太平洋の方面に出でウエツデル海を探検する筈である、當時探検隊はビクトリヤ地の西岸とケルグエレン島とに各一個の駐在地を設立して、左記諸學科の研究計畫をした。

地理學 上陸をなし得る二三の地に於ては、成るべく上陸を試み精細なる調査をなすこと、其の研究の範圍は極地方に固有なる氷山の性質、構造、溫度、漂

獨逸南極探検船ガウス號

流移動の狀態等に及ぶ。

海洋學 錘測は四十度の並行圈以南と同緯度以北の太平洋の一部分に試み、同時に海水溫度、比重、水底並に水中に含める瓦斯等の分析、水色、水の移動の有様に至るまで研究す。

測地學 振子觀測と比例五萬分一製圖測量等。

地質並に化學 船舶航行中又は氷上航行中に得たる標本の研究海水の分析。

古生物學 動植物の化石研究にして其の結果南極地方と其他の地方との關係に就いての論定。

動物學並に植物學 地上沿岸の淡水、深海等に棲息する動植物の全般に亘る採集は之れを船中に藏め、同時に海流の影響が如何に動植物に及ぼすかの研究。

醫學 極地に於ける衛生、生理、有機物の發育、並にバクテリアの研究。

氣象學 氣壓、風、氣温、溫度、日照時間等又探検隊が携帶すべき定製輕氣球を用ひて、上層氣界の濕度等の觀測、此の輕氣球は五百米の高さまで上騰する筈なれば同時に地理學上の偵察にも使用し得。

星學 星學的位置の測定。

其他尙ほ鯨類、臘膈獸、食用魚類の存否多寡を特に島嶼の附近ビクトリヤ地の駐在所又はケルグエレン島駐在所の附近にて觀測研究す。

以上は獨逸探検隊の豫定で、英國の國庫補助と有志者の義捐とによりてなれる探検隊も、畧ぼ其の目的を同ふし相共に助力する事を約し、獨逸は太平洋の方面を、英國は印度洋と大西洋との方面を探検する事に定めた。

○地理學界に貢獻せる結果

ガウス號出立以來の消息を聞くに、同號はクープ、タウンシに向ひて歸航中、去

獨逸南極探検船ガウス號



## 南極探検船ガウス號

明治卅六年六月ダーバンに寄港し、越年塲所は始め南極の圈上に於てするの豫定であつたから、南緯六十六度二分東經八十九度四十八分に於て、新に陸地を發見して此所に越年した、越年中船は厚さ三十呎の凍氷の中に閉され、加ふるに數十呎の積雪を以て其上を掩はれた、されど探検は好結果を奏して、地理學界に貢獻したのは、主としてターミネーション地の不存在の認定と云ふ事である。

## ○同號の太西洋面の海洋學調査

又其の太西洋に於ける海洋學上の調査は、赤道よりケーブ、タウンに至る間、深度三、一六五乃至七、二三〇米の海底大深溝に於て二十七回の錘測をした、こはドリガルスキ教授が從來の錘測に疑を抱き更に調査したもので、從來の船が曾て七二三〇米の深溝を錘測した測點に於て、今回錘測の結果は僅かに一四〇米の差を得た計で、錘測の結果、ブラシル深溝が赤道にまで達せることを確證した、

其他同探検隊はズーバン教授の所謂ファルヒシユリユッケンは北南の方向に延長して大西洋淺海帯に連り從來想像せる如く西經三度と四度との中間に於て東西に連り曳かざること、並に南アフリカ深溝はトリスタン、ダ、クンハ島の附近に迄で擴張せること等を確め、又南太西洋の海底沈積層の研究は、ガウス號乗組の學者によりて施行せられ、殊に指摘すべきものは、ケイブ深溝赤色粘土帯の東縁に於て、南緯三十五度五十二分東經十三度八分深度四九五七米の處より得たる、頗る不思議なる沈積物の標本である、此の沈積物は多量の石英砂の尙ほ稜角を存するもの、長石、並に角岩の結晶と混するもので、此の砂土が陸地より如斯遠距離に存在せるは、實に面白い現象で、此の事實は風力若しくは海流によりて輸送せられたのでなく、或は氷山の爲めに輸送せられたものであると判せられた。

## ○同號の未知大陸望見

## 南極探検船ガウス號

## 南極探検船ガウス號

ガウス號がケルグエレン群島を出發したのは明治三十五年一月卅一日で、バルデビア號の探検隊に眞似て、ウイルクス氏の所謂ターミネーション地の方面に向つたが、遂に其の陸地を搜索する事が出来なかつた、本探検船が始めて氷山の間に入つたのは、南緯六十一度五十八分、東經九十五度八分の所で、二月始めて遠方に未知の一陸を望見する事が出来た、夫れより探検隊は航路を西方に採り遂に氷塊堆積の間に封鎖せられて、此處に越年し、明治三十六年二月八日漸く開放せられた。

前述の如くガウス號の越年地は、陸地より遠距離に於て、既に氷山により一定せられ、漸次船体は全く氷山間に封鎖せられ、明治三十六年一月末頃までは、船は毫も漂泊移動の憂はなかつたから、却つて生物學、地球磁力、氣象學等に関する諸事業の研究は、陸上に於けるよりも好都合であつた。

## ○白盤々の中に立てる一火山

越年地點の基礎を爲せる氷塊の位置固定に就いて、ドリガルススキ氏の説に従ふと、其の原因は海底構造の如何によるもの、如く、即ち此の區域の海底は深度三〇〇乃至四〇〇米にして、淺堆が各所に散在し、且つ越年期中殆んど常に東風の吹いた爲めであらう、海底は南方に赴くに從ひて漸く淺く、又淺堆上に大氷山の打ち上げられた者がある、而して越年地點の西方八浬に達せる淺堆に於ては、深度僅に一一九米で、本船を去る六浬に至るまでは、裂罅や水道があつても、尙此の地方に於ける氷の永久的存在を説明する事が出来る、又此の氷山を精査して一海灣を發見した。

此の海灣の内には一火山があつて、之をガウスベルグと名づけた、此の火山の四邊は全く氷を飲み、高温なる事を想像される、地形の複雑したウイルクス諸内

## 南極探検船ガウス號

## 南極探検船ガウス號

陸に於て、火山を發見したのは抑々之が嚆矢である、海灣の西岸は、舌状を爲せる浮氷によりて形成せられ、此の氷塊の性質は尙不明で、ドリガルスキ氏は特に西の氷と名づけてゐる、探検隊は冬期間各種の科學的諸觀測に従事し、明治卅五年三月廿九日は快晴であつたから、三回輕氣球を飛揚させて、ドリガルスキ、ルーゼル、ヒリツプ三氏は、五〇〇米の空中より附近の地形を見下したが、ガウスベルグ火山を除くの外は、滿目白皚々たる氷野であつた、此の觀測によつて、海灣の東より西に到る一帶の海岸線を圖上に描いて、冰山、流水、裂罅、不凍水道等の位置概形を記入する事が出来た。

## ○猛烈なる大吹雪の實狀

氣候に就いては、ドリガルスキ氏は、前諸探検員と同じく、南極地方は天候の變化甚だしく、一點雲なき快晴も須臾にして猛烈なる吹雪と變じ、千變萬化する

ものと考へたが、豫想とは反對で九月上旬より、四月下旬に至る間比較的好季節に會した、此間晴天數日に亘る事があつて、多大な便宜を與へた、されど晴天も俄に吹雪を起した時は、其勢猛烈で迎も直立する事が出来なかつた、特に冬期は吹雪の回数極めて多く三月より八月までの間は諸觀測に差支を起した事が多い。

曩に南極地方の探検をしたベルジカ號及び、英船サウザン、クロス號の海員と同じく、本探検船の海員も亦業務の余暇銃獵をして其の獲物は探検主要の副食物として供給せられた、二種のマンシオーは主に探検隊が率ゐた犬の食料に充てたが、其の皮や脂肪は燃料に用ゐた、海豹を獲る百五十頭の多きに達した。

各冬期間を首尾よく経過したガウス號は、越年せるに拘はらず、船体は毫も損じないで無事にダーバンに歸航した、船中でさしたる寒氣を感じなかつたのは、

## 南極探検船ガウス號

獨逸南極探検船ガウス號

全く蒸氣暖房器を用ひないで、無煙炭を燃料とした暖爐を用ひたからだと云ふ事だ。

○氷塊破碎と其の融解

九月より十二月月上旬までに、七回の氷上橋行探検を行ひ、ガウス氷山に登りて地質學上、海洋學上等の諸研究をした、又たインランヂスの側縁及び『西の氷』の方面其他ボサドウスキ海灣の地形測量をも試みた、此の諸探検は周圍の氷塊と大陸との關係、又特に本船越年地點に於ける氷塊の特徴等に就き、其の實況を確知したる事に於て科學上至大なる價值を有するものである、されど、ドリガルススキ氏が内陸の探検を企てなかつたのは不思議だが、蓋し此の企畫は、さまざま難澁な事とは考へられない。

ガウス號が氷塊の爲に航行を遮られて、其の越年地點に繋かれ、明治三十五

年十二月より翌年二月に至る迄は、氷上の探検さへ行ふ事が出来なかつた、氷塊の破壊する事が屢々であつたから、探検隊員は本船を封鎖外の海面に曳き出さんと勉め、廢棄物や灰燼を使つて、本船四圍の氷を融解させやうとし、或は一の裂罅より他の裂罅に至る間に、長さ二軒幅十數米の二線を畫して融氷せしめて、其の域内の氷を排除し、尙ほ太陽熱によつて氷面の弱所に新に裂罅を生せしめたので、遂に其の四近を融解させて漸く船体の封鎖を免るゝ事を得せしめた、時は恰も二月八日であつた。

○二個の大旋風帶區域に越年

然るに翌日更らに『西の氷』に封鎖せられ、航行の自由となつたのは三月の中旬であつた、歸航の際南緯六十五度三十二分附近の地點と、殆んど並行圈上に於ける數時間の深度錘測の結果に據ると、深度三七一米より俄かに一一〇三米及び

獨逸南極探検船ガウス號

獨逸南極探検船ガウス號

一六一一メートルの深底と成つた、越年地點より約一度の北方に至ると氣候漸く和らぎ風向も東風のみならず、時々一陣の西風吹來りて、單調なる南極の風景を破つたされば本探検船は南極地方に固有なる東西南方向相反せる、二ヶの大旋風區域の境界に於て越年したものと思はれる。

此の大探検事業の報告が未だ公にされないのは勿論で、其の概略を知る事さへ六ヶ敷いが、ズーパン氏の記事の如きは主要な者である、現今までケンプ地とエーデルバイ地とは共に、各一個の島地と考へ、且つ其の中間に洋海があつて、著しく南方に浸入せるものとしてゐたが、ガウス號の海洋學的諸探検と地形測量との結果に據ると、東經五十度より百五十度に至る間は、正しく峻はしい大陸の側縁が擴張せられて、沿岸線は土地の陥落によつて切斷せられ、其の方向は畧ぼ平行圏と一致して居る、要するにドリガルススキ氏の事業は、統一を欲ぎ終航點は南

緯六十七度を超へざる一大冒險に終つたが、其の爲す所精査で、且つ事業の完全な事は歎賞に値する、本船往航の際ケルグエレン群島に残した探検隊員の一部は明治七年ベヌス號の學者が滞在した地點の附近に駐屯所を設けたが、エゼンスベルグ氏は脚氣病のため明治三十六年遂に異境に歿し、又ウエルト氏も同病に罹つたが深洲に轉地療養をしたので、九死に一生を得た位で、科學的事業に好結果を収めなかつたのは惜しい事だ、ドリガルススキ氏一行は、其後獨逸のキール港に無事安着したと云ふ事である。

英國

ヂスカバリー號の探検(第一圖第)

往年南極探検の爲めビクトリヤ地にある英船ヂスカバリー號に、食料品補給の

英國ヂスカバリー號の探検

英國デスカバリー號の探検

目的で、モーニング號は嘗て該地探検を遂げたウィリアム・コルベック氏を船長として、完全な科學的設備をして、我が明治三十五年七月歐羅巴を出發し、其の翌年三月其の南極探検第一期報告を齎らして新西蘭のリツテルトンに着した。

デスカバリー號はスコット氏指揮の下に、我が明治卅四年十二月新西蘭を發して南航の途に就いた、本船の始めて氷山に出會つたのは、明治卅五年一月四日南緯六十七度の海上で、夫れより五日を経てアデシ海角を過ぎ、同十七日にはウードベイ二十日には南緯七十六度卅分に位せる港を後にして、氷壁に沿ひて進み四十餘年前ロス氏の達した最南點の南を東航して同月末西經百五十二度卅分南緯七十六度の處に到り、陸上の高さ數千呎のエドワード王第七世地のある事を發見した、本船は從來の探検船より一五〇哩の東方に未探區域を航行して、針路を西方に轉じ、歸航中には西經百七十四度邊で、高さ九〇〇呎位の氷壁中に一の入

江を見たから、直ちに江内に進航して二月三日遂に南緯七十五度五十分

○氣絶する計りの大困難

本船の海上探検は、ビクトリヤ地の西岸で、二月七日南緯七十八度五十分を以て終點とし、エレブス(高さ一二三六五呎)、テロル(高さ一〇八八呎)、の二山の聳立せる島の南端アルミテーシ崎の東に越年した、越年中最低氣温は氷點下五二〇七度、船長スコット氏を始めウイルソン、シャックルトンの兩氏は、本船を棄て、氷山を楫駕し、南進して西經百六十三度南緯八十二度七分に達した、此の地點は嘗に本探検支隊の達した最南點なるのみならず、未だ會て探検隊の達し得なかつた極地の最近點である、此の旅行は凡そ九十日間を費し非常なる困難を経て、シャックルトン氏の如きは殆んど氣絶する計であつた、又たアルミテーシ氏の探検支隊は越年地より、西方に向ひウキクタリア地の内地に入り、南緯七十七度二

英國デスカバリー號の探検

英國サスカバリー號の探検  
 十一分、東經百五十七度廿五分なる高地に達した、之れ又同探検隊の最西點である。

以上は明治卅六年三月モーニング號の越年地解纜迄にテ號の探検した事業の概略で、其の地理學上に吾人の得たる新知識は、ビクトリア地には諸山脈が連亘して、南緯八十二度邊にては、數千米の高距を有し、沿岸の地貌は英國水路部の海圖に東經百六十度に在りとせる地貌に似てゐる、アルミテーシ氏の氷河を攀ちて達した陸地の内部は、平坦な高原狀で、沿岸線は少くとも南緯八十三度廿分に至るまで、殆んど直線的に南走してゐた、又スコット氏の説に據ると、彼の有名な『氷壁』は實に平坦で、水面に浮遊せるもの、如く、ベルナツチ氏の説の如く、『陸氷』即ち沿岸の氷山によりて成生したものだと言ふ事だ。

越年中、其の附近に於ける數回の探検に據ると、アルミテーシ岬を南西に突出

せしむる半島に一火口を發見した、此の岬角より約十七地理里にブラウン島がある、尙約三地理里を隔て、ブラック島ワイト島がある。

ブラウン島は褐色の玄武岩より成り、其の頂に一噴火口がある、ブラウン島と凍氷せる海峡を距て、大陸部にチスカバリー山がある、孤立せる圓錐狀の山で、此山とブラウン島、及び、同島とブラック島との間には、一條の岩層が帯形に續いて居る、ブラウン島の四周は岩層帯を以て圍まれてゐるから、岸を距つる數里間は機行し難く、岩層は時に堆積して一六〇呎の高さに達してゐる、此等の堆積物はチスカバリー山の南側にある氷河から成長したもののやうだ。

以上はモーニング號の歸航迄に企てた大略で、エレブス島の南岸、及び同緯度以南の南ビクトリア地エレブス島南方の諸島嶼、エドワード王七世地は全く本探検隊の發見に係るもので、實にサウザンクロス號の南極探検以後新に地理學界に

英國デスカバリー號の探検

多大なる貢献を與へたものである。

○兩船相互の連絡絶ゆ

デスカバリー號は、二年間南極探検に従事した後、明治三十七年リッツェルトンに歸着した、これより先きモーニング號及びテラノバ號の兩汽船は、石炭及び食料品を満載して、南極探検隊救護の爲め英國より派遣せられ、モーニング號は明治三十六年末頃流氷中に達してより、デスカバリー號を封鎖せる氷源の前沖なるマツク、ミユルド水道に到着した、其間氷は漂流して稀に峭壁を作つてゐた計で、ロス海は航行全く自由で結氷を見ず、天も亦殆んど清明であつた、其の軟風軽く吹いて波穏なる光景は、救護員をしてさながら地中海上に在るが如くに感せしめた、かくて南緯七十八度附近はよかつたが、モーニング號は明治三十七年一月を以て、デスカバリー號を距る二十九軒の所に達したるにも拘はらず、以後六

週間兩船相互に連絡を絶つ悲境に陥つた、是れ全く氷塊が同號船艙を壓迫したからで、若し今回の救護船派遣がなかつたなら、乗組員は英國水路部の命令に基き、本船を捨てなければならなかつたかも知れない、十二月中旬には本船の北十二軒餘の所に駐在所を設け、水夫をして鋸を以て氷中に水路を開かしめたが、其擧は長さ一六三米の水路を開いたが海水面は尙ほ本船を距る二七、三軒の處にあつて、氷は再び此の水路を封鎖したので、乗組員一同は此事業を断念した程であつた、斯くて救護船の到着後も種々の手段で、デスカバリー號を氷中より出さうとして、非常な艱難を嘗め一時は絶望に瀕したが、遂に一月十四日の夜に至り爆發薬を用つて、氷中に漸く一條の水路を開いたから、デ號の船長スコット氏は、船員一同と共に喜びを以て同船を再び水上に見る事が出来て、石炭を轉載して歸航に就く前、ウード及びピロベルトソンの二灣を探検し、殊にピクトリヤ

英國デスカバリー號の探検



英國サスカマリ號の探検

地の西方バレーニ諸島の間を横断し、百五十六度の子午線上即ちアデリー地の  
一地點に達した、又同船は此の地點の東方に從來圖上に示した海岸線は、實際に  
存在しない事を確め、又たウイルクス地の諸地の如きも一つの唇氣樓たるに過ぎ  
ないで、リンゴールド、クノール、レノールドピーク及びハドソン岬等何れも存  
在しない事を知つた。

英國探検隊の第二回越年中は、頗る幸福に其の時日を送りスコット氏が氷上橋  
行探検の終期の或一探検に於て不幸にも一水夫を失ひたるの外、乗組員一同無事  
であつた、之れ實に探検隊組織の周到なると、船長の統率其の宜しきを得た結果  
である、此連続した二回の越年は共に南緯七十八度以南の地で、長夜の地であつ  
たから、困難を想像する事が出来る前後三回の探検事業は科學上の効果を収めた  
事が偉大であつた。

○中佐より大佐に進めらる

スコット氏は自ら明治三十六年十月より、主要なる探検隊を率ひて、ピクトリ  
ヤ地の内部に、從來磁力の極の存するならんと假定した位置に向ひて出發し、本  
船を距る百餘軒の氷河上に往つたが橋に破損を生じたので、一應本船に歸り數日  
後更に同探検に従事した、此の橋行探検は先づ海岸附近の山地から氷上を西方に  
向ひ、十一月を以て東經百五十五度三十分に達した、夫れから八日半の行程で南  
緯七十八度、東經百四十六度三十分の地點に達し前記の氷河に達し、クリスマス  
の前晩を以て本船に歸つた、氏の觀察に據るとピクトリヤ地は規則正しく、高距  
二七〇〇米の氷を以て蔽はれた廣漠際限なき平原で一行は海岸に沿ふて、連亘せ  
る山脈を見失ひし後は、更に土壤の存在を認むるを得ず、磁力の極の位置を搜索  
するには、南緯七十四度東經百十六度附近を探らざる可らずして、ロス氏は其位

英國サスカマリ號の探検

## 英國サスカバリー號の探検

置を南緯七十五度五分東經百五十四度八分の處に置いた様だ、又たボルグレピンク氏は計算の結果南緯七十三度二十分東經百四十六度に定めた、スコット氏の探検に伴へる発見の主要なものは、地質學者フエラー氏の海岸附近の氷河を有せる一谿谷で其の成生當時の位置にある砂岩中から植物の化石を発見した事實で此の化石は中世紀のものだと云ふ事だ。

其他効果の多い探検は、有名な氷橋の表面に於けるロイツ、ベルナツチ兩氏の探検であつた十一月五週間の食料を携へて越年地點を出發し、本船から二五六軒南東に向つて遠く離れたが、到る處平坦な原野で更らに陸地を見ない、又た其の進行中一の障礙物にも會はなかつた、此の廣大なる氷から出來た平原は、海上に浮游して居ることを確めた、尙ほバルンミュロン兩氏も人夫四人を率ひて南緯八十度に進進してビクトリヤ地に於て、同緯度に位せる一大灣口を研究した、其

の結果此の灣は内部陸地から推し來る所の強大なる、氷河により填充せられ居る事を確め、又氷橋は陸地に接觸せる事實を知つた。

以上は今回探検した結果の主要である、尙ほ吾人の注意し置くべきは此の探検には犬を用ひない一事である、要するに今回の探検は、一八三八年から一八四三年に涉れるロス氏の諸探検以後、今回の如く南極地方に關する吾人の智識を増加せしめたる者はない、かくてサスカバリー號は明治三十七年九月ポーツマスに安着し、熱誠なる招待會に臨み、指揮官スコット中佐は大佐に進められた。

## ○スコット氏の探検報告

今スコット氏一行が二年以上エンプス山陰に滞在して、地理學上偉大なる探検をした成績を、從來の白、瑞、獨、諸國の派遣した探検隊の結果に比すると、地球南極の状況に關して明瞭な觀念を吾人に與て居る、始め氏等一行は新西蘭か

## 英國サスカバリー號の探検

英國デスカバリー號の探検

ら南方に航し、南緯七十度東經百七十度の點に於て、急に海上より隆起せる彼のアドレ岬に到着した、而して此の山を負へる海岸線を、優に八〇〇哩の間、橋により或は船により殆ど一直線に進み、以て南緯八十四度まで着せんと企てた、此の間スコット氏の觀察を以てすれば、此の大陸は高距一五〇〇〇呎以上に屹立し、グラハム地からケープホルンの南方までは、事實上何等の分裂なくて連続し外部は大平洋面に接すると共に、内部は南極に位せるを發見した。

之れ一行が山陵を負へる海岸を通りて西進し、高大無限の氷野に來り、高距九〇〇〇呎以上の高峰に達したるよりして分明となつたもので、大陸の見え能ふだけ又達し能ふだけ、極西に延長せしことは何等の疑なかつたようだ。

されど只一の問題は此の高臺が南極に對し那邊まで延長したかの問題である、獨逸の探検家等は東經九十度の南極圏外に於て、一連の海岸線を發見した事が

ある而して之れとアドレ角との間に於て、往時の探検隊は數個所に陸地の徴候を圖表し、又他の一面に東經五十度に至るまで同一の兆候を記録した、果して然らばアドレ角より、少くともエンデルビイ地に至るまでは、實際一連の海岸線があつて、印度洋に面し、且つ其の海岸とスコット氏等一行の繞れる海岸との間には、氷を以て掩はれた高臺があつたが、スコットは斯の如きもの實際あつたと考ふるもの、様だ、されど氏の説はビクトリヤ地とグラハム地の間をして連続せるものならしめば、該大陸の輪廓はエンデルビイ地より大西洋に面し、コーツ地に沿ふてグラハム地に至る間連續せられたものと云つて善い、此の場合に於てエドワード七世地は、該大陸と隔離せるものなるやも知れない、されどエドワード七世地は、一方にはビクトリヤ地と連続し、他方にはグラハム地と連結して居るとの意見がある、是等の推論を以てすると、氷堤は其間の一大海灣に閉された者かも知

英國デスカバリー號の探検

## 英國「スカパリー」號の探検

れない、要するにスコット氏のビクトリア地と印度洋との高岸の地方に關する想像は頗る信す可きもので、其の委細は將來多少の變更があらうが、是によつて南極大陸の現存は事實に於て疑を容れない、又彼の氷堤は數千呎の斷崖をして海上に聳え、今を距る六十餘年前、シエームス氏の發見した當時に比して、二十乃至三十海里南方に退却して居る、加之當時に想像された如く、それは陸地氷河の面でなく一大氷田の一端たる事は、スコット氏の浮動を證せるによつて、明らかである、該氷田は面積に於ても厚さに於ても、時代の経過と共に従前より徐々に減少したもので、嘗て其の下底は陸面に接觸した事のあるのに、斯く水底の減少すると共に、氷の著しい退却の形跡あるは、探検隊一行の共に認むる所であつた、尚ロス氏は降雪は南半球の夏期に於て最も多く存すと云へど、それは猶四十五時の壓縮せる少量の雪に過ぎないとの結論に達し、更に一步を進めて、高臺に於け

る蒸發は假令此の降雪量氷に超ゆる事少しとするも、少くとも同量なるものと思つた、之れ現在南極大陸の大部分を包める氷塊が、次第に退却するによつて頗る説明を得たものである。

尙、地質學の方面に於て南極大陸の特に興味あるは、約二千尺の砂岩の厚層が花崗石の上に堆積して、上層は玄武岩を以て蔽はれ、全く水平の地面をして數千方哩の大地方をも形成せる事なく、地質學者フェラル氏は、此の砂岩中から岩質化石を發見したが、不幸にも非常なる壓迫を受けたから、其の何物なるやを辨別する事が出来ない、されど、其の植物質たるは疑ない所で、過去に於ては現今よりも、氣温の温度であつた事を推知す可きものだ。

## ○スコット氏の新計畫

スコット氏の新計畫

## スコット氏の新計画

## ○今回の計画

其後明治四十二年スコット氏は、倫敦各新聞紙に寄書して、明年南極を探検する計画を発表して、其の資金四十萬圓の義捐を求めた、其の目的は南極に到達し、大英國の爲めに其の成功の名譽を得るにあるので、其の準備は従來の根據地はマックマードー海峡にあるから、新努力を此の地點に加ふるが一見至當なるが如きも、科學の示す所と英國探検の習慣とによると、總ての新努力は新地歩を占むるを望むから、第二根據地を同海峡の東方四百哩の所に建設せんとし、南極進入は事情に應じて、此の新舊二根據地の何れよりか發するであらう。

各營地から南極に達する問題は輸送である、各營地は其の位置こそ異なるが、南極までの往復は何れも約一千五百哩で、これに要する一期間の時日は約百五十日である、此間を重き橋の荷物を挽く方法は三つある、即ち小馬、犬、自動車であ

る、シャックルトン君は氷堤の表面に於ける小馬の挽引力の偉大な結果を示したが、又氷河に於ける動作の不適當な事をも示した、犬は若し荷の重きに過ぎない時は、氷河上の用に供せらる可く、若し其荷を輕め適宜に操り十分の食を與へたら、全行程を跋涉せしめられる、自動橋は新式で將來の極地輸送に最も有望なものとならう、シャックルトン君は最近の南極探検に一動車を用ゐ、それが最低温度中にも能く駛走し得る事を明にしたのは注目す可き事である、それが長距離を駛走し得なかつたのは、其が車輪の構造が不十分で、自動車を雪上に支へ得なかつたからである、自動車は斯かる雪面にも用ゐられ、其長さは危険な裂目の橋とするに足る、エドワード七世地から南極に至る行程には、此の三法を採用し、小馬には氷河の麓まで適當の食料を運ばせ、犬の隊には氷河の氷面を渡らし、自動雪車は輸送法の重な機關で、氷河を渡り得べきは疑がない、縦令氷河に達し得ないとす

## スコット氏の新計画

スコット氏の新計画  
 るも、小馬と犬との荷を軽減する事が出来る。

### ○科學的目的と探検準備

此の探検の科學上の目的は、第一地理的にはエドワード七世地を探検し、大氷堤の性質と大きさを明かにし、ビクトリア州の大山脈の測量を繼續し、磁氣學的にはチスカバリー號が、磁氣機によつて調査した第一記録を、更に同機によりて培加し、其の比較研究によつて、磁極異動の上に光明を投ずる考だ。

此の探検を遂行するには強健なる一隊の人士と、大なる準備とを要する、探検隊が坐乗す可き船は、エドワード七世地の氷山の間を行くに足る大きさで、且つ堅固でなければ成らぬ、此等を計算すると四十萬圓の費用がかかる、願くは費用の缺乏の爲めに中止の厄に遭はしめざる事を、此の目的は英國の過去の功蹟を誇りとする人、英國々旗の南極に建てられるを望む人に懇へると發表した。

### ○探検の動機

此の新計画は此の寄書發表の二週間前に、クック、ベアリー兩氏が全歐を震撼せしめた北極探検の成功と、且つは紐育通信はクック、ベアリー兩氏の成功に激刺せられて、更らに南極を究めて米國の名譽を増さんと企てる報があつたからだと云ふ、しかし、スコット大佐の計畫が米國に先鞭を着ける爲めに、全然新たに立てられたものとするのは大なる誤解で、大佐が再び南極を探検すると云ふ事は、早くから世に傳はつた事で、シャクルトン氏も亦昨年大佐の新根據地を置くの地點を考へた事があるか、俄に費用の寄附を募り始めたのは、米人の成功が其の動機を爲し居るのは言ふまでもない事だ。

願れば大佐は明治三十四年英國政府が、四十五萬圓を支出し、次いで民間の寄附を募つて百二十萬圓の探検費を得、一大探検隊を組織した時、幾多の候補者中

スコット氏の新計画

から撰ばれて其の統御の任に當つた人物である、探検は同年より同四年に亘つたが、其の探検によつて嘗てサア、ヂエムス、クラーク、ロツス氏が陸地と推定したのは、一の大陸なる事を確めた、之が今のエドワード七世地である、ビクトリア州の大山脈を發見したのも大佐である、南緯八十度二十七分に達して、ポルチエグレキング氏のレコードを破つたのも大佐である、昨年一月南極に突進して之を距る百十一哩に達した、シャツクルトン氏は實に當時の一分隊長であつた。

大佐はシャツクルトン氏が用つた滿州馬、エスキモー犬等の買入、自動雪車の製造に着手して、準備は先月終を告げたから、副長エワンス大尉以下と共に、英國を出發したのは六月である、一行は多くは前回チスカバリー號に乗つて、探検の經驗ある人々であるが、シャツクルトン氏だけは講演の約束の爲めに、同行する事が出来ないと言ふ事だ、我が白瀬中尉の探検と果して孰れか先鞭を着くるであらうか。

であらうか。

### ○シャツクルトン大尉の南極探検

○南極に存する大陸

最近全世界に英名を轟かした、英國南極探検家シャツクルトン大尉の探検は未曾有の成功を得た、此の空前の名譽を荷へる大尉探検の成功は今や全歐の學術界を驚嘆せしめ、其の英國に歸るの日は英雄を以て迎へられた、從來の探検によれば北極が海なるに反して南極には濠州より廣大な大陸の存するは疑ないが、要するに雪と氷山とに掩はれた三百萬方哩の死土に過ぎない、かゝる絶域を探検して其の秘密を發くは一見何等の利益はない様だが、其實學術上に及ぼす効果は多い、例へばシャツクルトン氏の發見した八千呎の一大廣原が南極に存する理由は、地球地轉の地軸が今日の状態に在りとする時は、重力と遠心力との學理に

シャツクルトン大尉の南極探検

シヤックルトン大尉の南極探検

反するから到底満足に説明し難く、地球現状の形式は地球が現地軸を取る以前にありと云ふ説が、當然勝利を得べく推して北半球全部の氷河時代を明にする鍵をも得られる。

○南極未知の地域は狭めらる

十五六世紀頃の南極地方に無限の富を求めむとする冒険的探検隊の事は兎も角一七七三年にゼームス、クーク氏が始めて南極圏を横断してから、純粹の學術探検に従事したものが十一人の多きに上つた『未知の地域』は次第に其の範圍を狭められたが、遂にシヤックルトン氏の爲めに、今や餘す所南極周圍の一小區域に過ぎない事と成つた。

大尉は絶大の執着心と洞察力とを以て、如何なる困難にも堪ゆる好指揮官で、燃ゆるが如き希望を達するに萬難を厭はず、事實萬難を犯す経験もあると云ふ事

だ、スコットが明治三十五年探検隊を率ゐて南極に向ひ、前人未踏の地に英國々旗を樹てた際、大尉は小隊長として辛苦を嘗めた勇士であつた、されば、此行必ず南極に英國々旗を樹てんと決心した大尉は、前回探検の経験によつて旅行用として、二個の新法を採つた、其一は特別製の自轉車で、石油を燃焼する汽罐より熱氣を傳ふる通氣管を脚臺に曳いて、流車の蒸氣管の如く脚を温むる用を爲さしめ、更に車臺の下にある小さな水槽に導き、雪を溶いて飲料洗滌の水を作る装置とし、後方の車輪は雪に喰ひ込ましむる様に、鐵の齒を附け前輪に雪車を附けたものである。

其二は酷寒と粗食とに堪ふる滿州馬數頭で、其内の四頭は最後に南極に突進するまで生存し、雪に水上運送に有効なるのみならず、一行は之を屠殺して粗食の不足を補ふ事を得た、一行は其他に猶間口十六尺、奥行三十三尺、二重窓を有す

シヤックルトン大尉の南極探検



シヤツクルトン大尉の南極探検

る木造家屋の材料と、諾威製の櫓、三十挺及び前回の探検に使用せる犬の子孫若干を準備した、是等の準備を以て南極に向へる一行は、シヤツクルトン氏を始めとし、総員三十二名何れも意志鐵の如く萬難を排して目的を達せんと意氣込むた。

○ニムロド號の出發

探検船ニムロド號一行の生命を預つて、極南の『死土』に向ふ可き探検船ニムロド號は、四十年前諾威に建造せられた海豹獵の船で、屢々氷山の間を航海して其の堅固を示した船歴がある、加ふるに三本の帆檣は新に樹て替へられ、索具等新たに張られ、甲板また改築せられたから、一日六噸の石炭を焚いて毎時七哩を航行し得べく、其の安全なること殆んど新造船と異なる所はなかつた。

機装全く成るやニムロド號は明治四十年七月三十日歡呼と涙とに送られて前橋高く其の政行と危険と成功の可能とを標象せる白旗『無主の地』を掲げて、徐々

としてテームス河を下つたがカウズに達するや、英國皇帝、皇后、皇太子、皇太子妃等相共にニムロド號を訪問し給ひ、殊に皇帝は親しく船の機装準備品を檢閲して後、スコット氏の例に従ひて、大尉にビクトリア勳章を、皇后は一旒の國旗を賜はれた。

○極南の活火山に登攀す

歡呼の間に英國を出發したニムロド號は、五ヶ月の後、無事新西蘭に到着、明治四十一年一月更らにリツテルトルを出發し、曾てスコットが取つた航路によりて、エレブス山の麓なるマツクマード灣に到着して、此處に上陸し積載せる材料を以てロイド岬附近に小屋を建築しこゝを根據と定め第一着に世界極南の活火山で、海拔一萬三千二百二十呎のエレブス山に登つた。

○猛烈なる大吹雪

シヤツクルトン大尉の南極探検

シヤツケルトン大尉の南極探検

登山隊は大尉アダムス、製圖家ブロックハースト、大學教授ダビド、外科醫兼海圖製作者マアシャル、外科助手マツケ、南極洲の科學者マアソンの六名より成り、三月五日樞を驅つて根據地を發したが、七日早朝海拔五千五百呎の高度に達して樞を捨て、各員食糧糧具を負ふて徒歩で登攀し、其夜九千五百呎の地點に達した、然るに其夜は寒威凜烈攝氏氷點下五十度なるに加へて、三十時間に亘る大吹雪に襲はれ其の地點に露營し、天候の定まるを待つて、再び登攀を強行し九日終に海拔一萬一千呎の地點に於て舊火山口に到着し、之を探検したが、其舊噴火口には長石、浮石及び硫黃の堆積せるを發見し、翌日更らに登山を續けエレブス山頂を窮めてこゝに活火山を探検した、活火山口は其直經半哩、深さ八百呎、極南無人の地滿目皓白の山脈中に特立して、多量の水蒸氣と硫化瓦斯とを中空二千呎の高さに噴出する様、眞に水火の修羅場何とも云へぬ光景だ、翌日ロ

イド岬の根據地に歸着し、此行ブロックハースト氏は足指に凍傷を受け遂に一方の拇指を切斷するに至つた。

○冬籠中の學術研究

四月より九月までは南半球の冬で探検に不便だから、一行は小屋に冬籠して學術觀察に従ひアダムス、ダビッド二氏はエレブス山の噴煙に基き氣象學、上層氣團氣の運動を觀察し、モレー氏は根據地附近の淡水湖水の細菌を研究して其の最高最冷何れにも堪え鹹水中にも生活し得ることを確め、湖水では菌植物並に特殊の苔類數種を發見し海中にも特殊なる二種の海藻繁茂せるを發見しマソン氏は極光の變化を記録し且つ極光及びエレブス山の噴煙と月光との景等を撮影し、ブロックハースト氏は湖底の生物學を研究し潮流の方向を測定し、マアソナル氏は活動寫眞を以て博物學上の撮影を爲し、マアソン氏は専ら風景並に極光

シヤツケルトン大尉の南極探検

シヤツクルト大尉の南極探検

の描寫に従ひ、以て徐に夏の來るを待つてゐた。

○糧食の埋藏に着手す

ロイド岬の根據地に冬籠りし、かく一陽の來復を待てる間も、探検隊は探檢の準備を懈らす一行を四隊に分ち、第一隊のみは、南極に第二隊は根據地の北方に第三隊は西方に、第四隊はニムロド號に乗じて南極洋の沿岸を探檢する事とし、天候快晴の時毎に其の準備に着手した、準備中の主要事は、豫備糧食の埋藏である、南極に達する道程は遠くて困難なが、其の日に要する糧食を運搬するは到底不可能事に屬するから、若干距離毎に糧食を雪中に埋藏して負擔を減少する方針を取り、六人より成る埋藏隊は糧食を満載せる自動車で、九月廿二日根據地を發し、酷寒に暴露されつゝ、南緯七十九度三十六分、東經百七十八度の地點を初めとし、南方四百哩の間數ヶ所に糧食を埋め、十月十三日根據地に歸着した。

○南極探檢隊の出發

此に於てシヤツクルトン、アダムス、マアシャル、ワイルドの四人より成る隊は、プロックハースト氏以下五名の補助隊と共に、四頭の滿洲馬に糧食、寢具、學術用具を負擔せしめ、十月廿九日南進の途に就いた、かくて一行はスコット大佐が、明治三十五年の冬を過ごした、ハットポイントに達し、茲で補助隊と分れ各人九十一日分の糧食を準備して、一行四人と四頭の馬とは、四挺の雪車を曳いて、肉をも裂くべき烈寒を犯して暴風雪の間に相呼應し、相警め千古無人の絶域を只管南進した。

氷山の裂罅の薄暗い爲めに、其の裂罅に陥つたアダムス氏と、一馬とは殆んど死せんとしたが、十一月十三日糧食埋藏隊が、九月に糧食を埋藏せる地點に達し之れを掘り起し、且つ日々食料を節約した、一行は東經百六十八度の經線に

シヤツクルト大尉の南極探檢

シヤックルトン大尉の南極探検

從つて南進したが、途上雪の深さは馬腹に達し、南緯八十一度四分に於て、滿洲馬を銃殺して、茲に歸途上の準備として、馬肉、脂肪、ビスケットを埋藏し、殘餘の肉を食して、乾燥せる食物を補つた、十一月廿六日には、スコット大佐が達した最南の地點に達せしが、雪野の表面は極めて軟かで、風の爲めに動搖定まらず、馬は皆日光の反射の爲めに失明した、二十八日又馬を殺して南緯八十二度五十二分、東經百七十度の地點に埋藏し、三十日に又馬を射殺した。

十二月一行は南々東に向ひ前方に南東に走れる新山脈を望見し、次で、氷河、氷河を發見し、五日南緯八十三度三十三分東經百七十二度の地點に於て氷河を越えんとしたが、其表面縦横に裂けて進行危険を極め、僅か四十間を行くに一日懸かつた、七日に成つて馬は底知らずの裂罅に陥り、ワイルド氏も亦殆んど同運命に遭はんとし、辛くも一命だけは助かつたが、馬を失つた爲めに、今や各人二



十八貫の重荷を曳かなければならぬ事となつた。

○糧食缺乏して歸途に就く

馬匹の全滅も恐るべき氷山の裂罅にも一行は意志を銷磨せず、銳利なる氷片の爲めに雪車を破損されても猛進を続け、十二月六日から南々東に延びた高原に登り始したが、當時糧食次第に乏しきを告げた、多量の食物を攝取すべき酷寒の地で不足に堪へつゝ、廿六日遂に九千呎の高原に達した食糧缺乏、空氣稀薄、寒威猛烈で氷點下三十七度より七十度の間を昇降し、一行は漸次衰弱せるにかゝはらず、尙ほ餘せる糧食の若干を割いて埋藏し、翌年一月四日一個の携帶天幕の布片を附けた棹を雪中に残して、歸路の目標として飽くまで進行を続け、三日間風雪の暴威と戦ひ、一月九日最後の力を揮つて猛進し、南緯八十八度二十三分、東經百六十二度、南極を距ること僅かに百十一哩の地點に達した、此處は人類が其の足跡

シヤックルトン大尉の南極探検

シヤックルトン大尉の南極探検

を印せる最南の地点で、スコット大佐の到達せる地点より南極に近きこと實に四百五十哩である、一行は更に南進せんと逸つたが積日の疲勞一時に加はり、糧食もまた全く缺乏したので、已むなく皇后の賜へる英國々旗を其の地点に樹て歸途に就いた。

### ○悲惨なる歸途の危険

歸途は往路よりも恐ろしく悲惨であつた、目標として樹てた天幕の布片は全く吹き断られて、一物もないまでに風は暴威を揮つた、されど此の暴風は南方より一行を吹き送つたので、疲れ果てた心神を鼓して、一日二十哩乃至二十九哩を進む事が出来た、此の風なかりせば一行は豫定日數中に、糧食埋藏地に達するを得ないで凍餓に命を隕したかも知れない、一行は行く／＼埋藏せる糧食を掘つて、辛くも露命を繋ぎ、二月二日先きに馬を埋藏した所に達したが、馬肉以外の食料

は全く盡きて、ワイルド氏先づ赤痢に襲はれ、次で他の三人に傳染し下痢の續くこと八日に及び、一行は氷上に轉輾し苦悶しつゝ、食を絶ちて死を待ちしに、暴風雪に助けられて蹶起し、二月十三日他の馬を埋藏した所に達するを得、漸くピスケットに有り付き、一行四名相抱擁して生の不思議なるを喜び合つた。

されどそれも一時の喜びで食は早く盡きて、剩さへ氷點以下五十度の寒氣に暴風雪を加へ、凍死する計に吹きすさんだ、そこで一行は寢具と地質學の材料以外の携帶品をすて、北進し、二月十三日ヂョイス氏の一隊が歸途に備へた、ミンナプラの埋藏所に達し食と書信とを得て蘇生の思ひをした、二十六日には更に強行をなしたが、マアシャル氏の疲勞其極に達したので氏をアダムス氏に托し、シヤックルトン大尉はワイルド氏と共に、更に強行して當時氷を破つて進行してハットポイントに碇泊せるニムロド號に救助を求め、三月救助隊と共に、マアシヤ

シヤックルトン大尉の南極探検

シヤツクルトン大尉の南極探検

ル氏等を、一同ニムロド號に歸着するを得た、此行踏破せる道程往復合せて一千七百〇八哩、日を費すこと百二十六日。

### ○第二隊以下の行動

諸科學の發見は姑く言はず、以下南磁極を發見せる第二隊以下の行を見るとき、探検中のマアスン、マツケイ、ダビド教授の三氏より成り、南磁極の所在を確定するを目的とした第二隊は、一人九十三日分の食料、製圖、測量の器械及び寢具等合せて、各人五十貫に相當する荷物を二挺の橇に積み、一昨年十一月ロイド岬の根據地を發し、行く／＼歸途の準備として糧食を埋藏すること例の如く、或は氷河の裂罅に陥らんとし、或は暴風雪中に凍死せんとし、氷點下六十度の寒氣に暴され、海豹の肉を食しつゝ、七千呎の山脈を超えて昨年一月遂に南磁極を探り當て、茲に英國々旗を樹て南緯七十二度二十五分、東經百五十四度に位する事を

確めた、斯く目的を果した第二隊は直ちに歸路に就いたが、途中氷河を超ゆる爲にや荷の一部を捨て、食糧日に窮乏を告げ、東海岸に出でた頃は、僅かにペンギン鳥を射て飢を凌ぎたる程であつた、會々其の近海を航してゐた第四隊ニムロド號は、二月四日に氷丘上なる糧食埋藏の目標を望見したので、危険を冒して海岸に接近し二發の爆彈を發して合圖をした、マアスン氏は驚喜して天幕より跳り出で全隊ニムロド號に收容された、此の行日を経る百二十二日道程千二百六十哩

### ○第三隊の行動

根據地の西方を探検する第三隊ブロックハースト、ブライストレー、アルミテージの三氏は、十二月一日ロイド岬を發して西進し、同じく五日バツターポイントに着し、ブライストレー氏は地質學上の材料を集め、ブロックハースト氏は寫眞を撮りつゝ、ファラア氷河を登つたが、ブ氏はノブヘド山に於て赤砂岩を發見

シヤツクルトン大尉の南極探検

シヤツクルトン大尉の南極探検

した、一月二日一行はバツターポイントに歸着し、或は第二隊と落ち合ふ豫想から其所に宿營して地質學上の研究を試みたが、四月廿三日の朝一行は宿舍の動揺するに驚いて起き出づると、身は宿舍を載せたる氷塊の海中に漂ひつゝあるを發見し、幸にも其夜潮流のために大氷塊に流着し、僅に身を以て免るゝ事が出來た、翌廿四日の朝ニムロド號を認めて合圖をして之に收容された。

○第四隊の任務

第四隊のニムロド號は根據地附近の海深、潮流を測定し、兼て沿岸の地點を以て踏査し、第一、第二、第三隊を收容すべき任務を帯び、一昨年十二月二十日以降、流水氷山の間を航して其の任務を力め、昨年一月先づ第三隊を救ひ次で二月第二隊を收容し、三月四日第一隊の四名を救つたから、こゝに一同は再會を喜び同八日新濠州に向つて航を轉じ、船の南緯六十九度四十八分東經百六十六度十一

分を過ぐる頃ピクトリア州の北端に數千呎の一新山脈を發見し、三月恙なく新濠州半月灣に歸つた。

○大尉の探検より得たる功績

かく新濠州半月灣に歸着すると同時に、シヤツクルトン大尉は既にデーリー、ル新聞に長文の電報を發し、同紙が其全文を公にするや、歐米の學術界の驚嘆は一方ならず、尋いて大尉の報告に對する學者の意見を發表するに及びて、益々功績の偉大なるに驚嘆した、即ち探検の結果中著しきは『南磁極を實地測定せること』、『南極大陸に於ける八火山脈を發見し、一百の連峰を測量せること』、『南極大陸に於ける石炭層を發見せること』、『南極の周圍には無風帶ありと云ふ假定學說の當らざるを證したること』等であるが、嘗てスコットの探検隊に加はつた地質學者ベルナツチ氏は其の經驗より一行の辛苦に同情し、中途で馬を失はなければ

シヤツクルトン大尉の南極探検

シヤツクルトン大尉の南極探検

南極に達したであらう、又南方に延びた大高原は、從來疑問の裡にあつた南極を中心とせる大陸の存在を確定せるもので、南極大陸は元と南亞米利加と新西蘭とに連接せりと云ふスコットの假説を確むべく、石炭の存在は南極が曾て温暖であつた事を示して、其の高原の存在と共に地軸が變遷せるを證するものと、評したるのみならず、併せて、南極が決して無風帯に非ずして暴風吹き荒む現象は、南半球の風位系統、及び逆旋風帯研究に益する所尠ならずと批評した。

又、南磁極の確定に關しては一層の詳報に接して後其功績を論すべきものだ、何となれば、磁極の附近に於ては、引力強烈な爲めに、器械の狂ひを生ずるから、されど其の航海術、製圖術に寄與すること尠ならざるべきは絮説を要しないと云ふ批評をも加はへた。

○諸科學者の批評と破天荒の名譽

北極探検家たるアルチンコンウエー氏は、大尉が南極大陸の發見は南半球の形成、殊にアンデス山脈及び新西蘭の發生に關する學說を一變せしむべく、製圖家は其の詳報を望むと云ひ、地震學の大家ミルン教授は、大尉は地理學の爲めに新大陸を發見し、地質學の爲めには新問題を提供せりと云ひ、マアカム提督並に南北極探検家ネーアス氏等も口を極めて激賞した。

されば一般社會も驚嘆し米國は祖國が此の快男子を出せるを誇りとなし、歐州大陸は皆一様に賞讃した、ダルキツチ大學は殊に大尉が其校出身なるの故を以て、大尉の長文電報の公表された三月二十四日を以て、シヤツクルトン日とし、校長は七百餘の學生を集めて之れを激勵した、大尉夫人は其愛らしき二子と共に、エダンバラに閑居して大尉の身の上を案じてゐたが、電文公表以後知ると知らざるに論なく、夫人に祝電を寄せるので、喜び極まつて狂せん計で、妾は良人の安

シヤツクルトン大尉の南極探検



シヤックルトン大尉の南極探検

全なるを知つて、嬉しき譬へんやうなし、約一年間一語の便りだに無かつた良人から此の名譽ある快報を得し妾が心はと新聞記者に語つたのである、かくてシヤックルトン氏は伊太利より上陸して陸路伊佛の兩國を経て、到る所で盛大なる歓迎を受けて、昨年六月十三日の夕暮ドヴァに上陸した、此時緑色の服を着た婦人が歡愉の色を渦高くして、波止場で着船を待つて居たが、應て船が波止場に着くと、綾羅紗の背廣に烏打帽と云ふ打装の青年と握手した、之がシヤックルトン夫妻の再會であつた、かくて同行合せて十二人、公式の歓迎を受くべくロンドンに向つて出發し、午後五時過ぎ同停車場に到着した、停車場に於てブラットホームに入ることを許されたものは、一行の親戚血族及公共團體の代表者等約二百名其前列なるはシヤックルトン氏の長男と長女であつた、其他數萬の歡迎者は停車場前の廣場に群集し斯の探検家の姿を見んものと待ち構へた、瀛車から下りたシ

シヤックルトン大尉の南極探検

ヤックルトンは二人の愛兒を見付けると、相貌を崩して微笑したが、地理學者、友人、親戚、故舊等が犇々として押し寄せ賀詞を述べて握手を求めたので、一時子供の姿を見失ひ、大尉は物に驚いた様な顔をしたが、其の群集を押し分けて、女兒を抱いた父シヤックルトン博士と男子を抱いたシヤックルトン大尉夫人の妹とが近付いて來た、大尉は是れを見るより又相格を崩して、二人を抱き寄せて屢々接吻した、次いで幾多の群衆は又押寄せて握手と賀詞とが忙しく言はれた、應て歡迎の重圍を脱して愛兒及び夫人の妹と共に馬車に乗つて場外に出ると、待ち構へた數萬の群集は帽子を打ちふり、手巾を振つて一齊に歡呼の聲を揚げた、愛兒が馬車の中で躍り上つて兩手を振るのを見た時は、群集は云ひ知らぬ嬉しさに打たれた、停車場にシヤックルトンを迎へた人々の中には、朝野の名士約數千名あつた、其後講演の約、本國は勿論、米國、獨逸、伊太利の諸國との間に成立

シヤックルトン大尉の南極探検  
し、殊に伊太利皇帝は自ら名譽金牌を賜ふことを約された。

### ○人間以上の力

却説す、大尉一行が南極に突進して飢餓に迫つた時、一行の話は端なく食物語になつた、各々がロンドンへ歸つて後最先に食たい物を云ひ合つたが、其飢が烈しくなつて乞食同様の境遇に成るに及んで、十六錢で腸詰一皿と甘露水一杯を取り得る人間は、随分と幸福者だとまで思ふに至つたと云ふ事だ、又シヤックルトン氏は曰く、此度の旅行の経験は終生吾等の記憶から消えまい、此間に吾等は人間以上の力があつて、吾等の進路を導いたと云ふことを痛切に感じた、吾等を無事本國に歸らしめたのも、亦此の力の爲す所であると信ずると、要するに、人は斯る境遇に接觸して始めて、其の中心の奥底に存する敬虔眞摯の念のむら／＼と湧き出づるもので、味ふ可き一語である。

## 蘇格蘭

### ○ブルース氏の探検

スコットランドは地方的愛國心によつて、有益な科學的事業を開發した、去る明治三十三年三月彼の海洋學に有名なモーレー氏は、海上事業に有力な一新發表をした、之れブルース氏の創意に係る南極探検の事業である、ブルース氏は既に明治廿五年にダンデックの捕鯨船に乗り、グラハム地の周圍を巡航した事もあつて、探検事業には尠からぬ経験を有する適當人物であつた。

豫定はグラハム地の東に位せるジョージ第四世海の方向に向ひ、夫より捕鯨船に乗り流水の間に水路を求めて陸地を探り、此處にて五名の専門家と共に二年間冬期越年を試み、船は探検員を上陸せしむるや直ちに歸航し、更に探検に必要な

ブルース氏の探検

## ブルース氏の探検

る食料の準備をなし、再び極地進入の目的に便利を興ふる計畫であつた、今ブルース氏の企てた探検隊は一般探検隊の地球磁力の研究に力を注ぐ傾向の中に立つて異つてゐたから、博物の學者は自己の科學に充分なる結果を得られないのを憂ひて居た。

該探検隊は其後二年を経て諾威の捕鯨船ヘフラを買入れ、スコチア號と命名した、ブルース氏は本船を以て、ウエデル海を探検すべく、航路をスコットランドよりフオーランドに取り、東方一千哩の所に進み、次ぎに南サントニツチを訪ひ直ちに南航する筈であつた、探検隊が海洋學上主要の目的とする處は、南緯六十八度三十四分西經十二度四十九分の四周に於て、シエームス、ロス氏が曾て發見した深度六、四〇〇米の海底と、バルデビア號の發見に係るボーベとエンデルバ、イ地間の深溝が、果して西方に擴張し居るや否やを調査するにあつた。

かくてスコチア號は其の目的地域たりしウエツデル海に於て好結果を奏し、船長ブルース氏外乗組員一同は、一九〇四年七月下旬無事クライドに到着し、エヂンバラ市民の款待を受け其の席上に於て、ジョン、モーレー氏は皇帝より特に探検隊に賜はりし祝電を奉讀し、尙ほスコットランド地理學協會よりは、モーレー氏の手を経て金牌をブルース氏に授與し、ロバートソン氏も亦金製賞牌を受領したと云ふ事だ。

## スコチア號探検事業

## ○第一回の報告

今此ブルース氏の探検事業第一回報告を叙せば、探検船スコチア號は、明治卅五年の秋本國を去り、明治卅六年一月初旬フオーランド群島中のスタンレ

スコチア號探検事業

スコチア探検事業

イ港に到着し、同月二十六日ウエツデル海に向ひ南極地方の探検を遂げて、同年十二月二日一旦スタンレイ港に歸着し、次いでベノスアイレスに來り、石炭其他の補給をなし再びウエツデル海に向て出發した。

該探検隊の目的とする處は可及的南進し、併せて海洋學上の諸觀測をなすにあつたから、南ラークニー諸島及び南サンドニツチ諸島より以南の海區に於ける、海洋學に關する吾人の智識を増進した事が多い。

五十一日間に亘る巡航探検中流水の外縁に沿ふて東方に進み、東經二十五度の附近に於いて、初めて氷塊中に水道の開けるを望み、直に航路を南に轉じて此水道に突入し、南緯七十度二十一分西經十七度の地點に達した、此地點は一八二三年ウエツデル氏の探検せる最南地點、南緯七十四度十五分に比し、約四度北方にある、而して三月二十一日にはラークニー諸島に歸帆し、ローリイ島にて

スコチア探検事業

越年した、其の巡航探検の航程は五、〇〇〇海里、ブルース氏は此の探検で平均深度四、五〇〇米以上の海區の存在を確認した、此の海區は即ち一八四三年ロス氏が、夫れより少しく東方で數回の錘測をして吾人に知らしめたる所である、探検船は巡航の終點で、更らに深度四、六五〇米を發見した氣温は、巡航期が夏期なるに極めて寒冷で、最低は氷點下十四度であつた、ローリイ島の越年地には露營の傍ら一の觀測所を設け、明治卅六年の南極冬期間の氣象及び磁力の觀測をした、越年後もモツスマン氏は五人の探検隊員と共に此處に残り、科學的觀測を繼續したが、亞爾然丁共和國政府よりは、特に四名の探検員を増派した、此の觀測所は堅牢なる建築物で、ウエツデル氏の探検以來未到の南ラークニー群島に設立せられたものである、而してスコチア號の越年碇泊地は、僅に南緯六十度と六十一度との間なりしにも拘はらず、堅氷中に閉鎖せられた、ブルース氏は冬期に於て

スコチア探検事業  
 は堅固な一面の大氷塊がグラハム地と、南ラークニー群島とを連結するものなることを推考し、且つ其の理由に基き此の純然たる海洋性の離島も亦一時大陸性を帯ぶるものと唱導した。

スコチア號はサツドル、ローリイ、コロネーション諸島を探検し、其の測量をしたが地形測量は不幸にも甚しき濃霧に遇ふ事が多うかつたのと、一日中氣温の變化の甚だしかつたので効果を奏しなかつた、南ラークニー群島は山地に富める島嶼で、其の犬牙錯雜せる地形は積雪及氷河を以て掩はれてゐた。

○スコチア號探検第二回報告

スコチア號探検事業の第二回報告は、明治三十八年に公刊せられた、曰く同卅七年一月探検船スコチア號は再び針路を南方に取り、ボエノス、アイレス港を解纜し、順路フオーランド群島のスタンレー港に寄港し、二月十四日には南方オ

ークニー群島に到着し、南方オークニー群島中の一島なるローリー島のスコチア港に於て、前年來施行しつゝあつた二個年繼續の氣象觀測事業の應援者として特に派遣せられた、スラムユラ、ヴァレット、アクナ三氏は上陸して、既に第一回探検の際より引き続き一年間滞在せしモツスマン氏と會合した、スコチア號は以上の諸氏を此地に残して、二月廿二日南東に向つて進み、南緯六十六度に到りて始めて叢氷に會つた、されど尙危険を冒して南進し、三月七日には南緯七十二度廿五分西經十八度、即ち一八四三年ロス氏が達した地點より、約五十哩の南方に南極大陸の一部とも認むべき陸地を見つけた、此の陸地は彼の南極に固有なる氷壁を以て海に臨めるが尙ほ此の海岸に沿ふて南西に進行すること約經線六度即ち南緯七十四度一分西經二十三度〇分（此回探検最南點）に到りし時、俄に暴風起り、船体は約壹週間水中に封鎖せられて、航行の自由を失つた、此の新發見に

## スコチア探検事業

係る南極大陸の一部は、ロス氏の探検隊が其の附近に航し乍らも、遂に発見し得なかつた所で、其の位置従来吾人の想像よりも、遙かに北方に在る者のやうだ、陸上は氷雪を以て掩はれ、一の生物を存せず僅に其の近海に水禽の群棲するのみで、コーツ地と命名した、スコチア號は三月十四日漸く叢氷區域から歸路に就いた、航海中は氣象觀測其他各種の調査、採集に怠らなかつたが、特に海洋學上の研究に重きを置き、殊に彼のロス深溝の存在が果して事實なりや否やを精査するを目的としたから、其の結果大西洋の南部はフォークランドと南オルクニーとの中間に、一の深き水道の存在せることを発見したが、ロス氏曾つて鉛錘を四、〇〇〇尋の深度に下してすら海底に達しなかつた深點は、遂に見當らないで、南緯六十八度三十分西經十二度四十九分に於てブルース氏は深度僅かに二、六六〇尋を錘測したに過ぎない、四月廿一日にはグーフ島に寄港上陸して、地質學上の踏

査及び有益なる各種の標本を採集した、夫れよりセント、ヘレナを経てアゾールズに到るまで深度錘測及び鳥類の採集をして、五月五日にはケープ、タウンを訪ひ、尋で七月一同は無事英國に歸着した。

以上は今回探検の結果の大略で地理學上吾人に惠與せられた知識は、新陸地の発見、グーフ島の調査、ロス深溝最深點の不存在及び其の海底の形態等に関する事項であつた。

## ○マツスマン氏とブルース氏

蘇格蘭皇立南極探検協會より氣測觀測のために派遣せられた、マツスマン氏は南オルクニー諸島スコチア灣に於て、二年間充分なる觀測を遂げた後、同地出發明治卅八年二月アルゼンチン共和國ボエノス、アイレンスに到着した。

## ○ブルース氏南極探検の新計畫

スコチア探検事業

スコチア探検事業

蘇國南極探検隊長ブルース氏は、近年スコチア號に乘じ更らに南極の新探検に着手した、其の豫定航路及び目的を見るに、一行は南部大西洋の海洋學的研究のためボエース、アイレスを基點とし、夫れから南緯四十度と五十五度の間に航路を採りて深度測定を試み、喜望峰に來りて更らに南サントニッチ諸島に向ひ、東に轉じてヴーウエー島に往き、最後に一八三〇年及び一八三二年にシスコエ氏が探検した方向に向つて南進する筈である、此の航程は實にバルヂピア號及びスコチア號が、今日までに錐測しなかつた部分で、全く大西洋の不明區域に行はるる譯だから新探検の結果はコーツ地、クラハム地、及びアンヌ、ド、ビスコエ岬等の關係を知る事が出来るであらう、探検隊はアンヌ、ド、ビスコエ灣に於て冬籠をなす豫定だ、吾人は杏として其後の消息を詳にしないが、其の鬱勃たる壯心に感ぜざるを得ない。

瑞典國

○瑞典南極探検船南極號

○瑞典國探検隊の任務

瑞典南極探検隊は明治三十四年十月、ドクトル、オット、ノルデンシヨルド氏主任となり、探検船南極號（船長ラルセン氏）を舩し南米大陸の南端なるエタ島に向つて出發した、此探検隊には動物學者オーリン、アンデルソン二氏、植物學者スコットベルグ、氣象學者兼海洋學研究者ボドマン、醫師エケロフの諸氏があつた、南極號はエタ島よりフオークランドを踏み南セントランド並にグラハム地の東岸キング、オスカルランドに向ふ豫定で、此の主任者たるノルデンシヨルド氏の計畫は、探検船南極號は冬期フオークランド若しくは南米沿岸に繋ぎ置き、

瑞典南極探検船南極號

## 瑞典南極探検船南極號

其の部下と共に冬期間居住に堪ゆべき地を撰定し、萬一其地を得なければ、尙ほ前方に進むで、更らに適當の根據地を求むる筈で該探検隊が當時調査せんと欲したる事項は曩に英獨探検隊との協議に基き瑞典國が負擔の責務を盡すにあつた。

## ○南極號の活動

南極號は先づ南米の南端テラツルフエゴ、ホルストタンレイに到り、夫れより明治三十四年一月二日を以て南セントランドの附近に達しチルソン島に上陸した、此地は僅かに小面積のみ氷山に露出してゐるが、博物學者は鮮苔類並に石松類を採集し、之れを以て同地方唯一の植物と判定した、ノルデンシヨルド氏の一行はチルソン島より途を南方に取りオルンアンヌ海峡に向つた、此の海峡は曾てウルピール氏が遙か濃霧中に望みて南方に開きたるものと思つた處で、探検隊は海峡を航行してグルラーシユ海峡の北東口に達した、而してグルラーシユ海峡の南側

を限れる陸地には一の水道も鑽入せざることを證明するを得て、從來の地圖訂正を要する事となつた、其の結果ルイ、ヒリツプ地はダンコ、グラハム兩地の北東端で、又グルラーシユ氏が既に想像した如く、バルメール地は一の島地たる事を判定した、探検隊は西部に於ける此の地點より更らに後方に逆航して、ルイ、ヒリツプ地の北側に沿ひ、此地とシヨワンピール島との中間の海峡を通航し、此の地方でも舊地圖の不正確を發見した、夫れより南緯六十六度に到つたが、凍氷のため更に南方に進む事が出来なかつたので、海洋學の研究を遂行し、南緯六十六度に於ては、一の岬角が流水の北限に沿ふて東方に突出せることを認め、且つ海中臺原の幅は頗る廣く、千米の同深線は海岸線を隔つること百二十哩の海上にあつて、其淺水層は水温極めて低く、四百米より五百米に至る水層に於ては零度であつた、然るに此海中臺原の區域を去りて其の限外に出ると、直ちに三千米乃

## 瑞典南極探検船南極號



## 瑞典南極探検船南極號

至四千米の深度があつて、西經四十五度の方向に一の深溝を畫してゐるやうに、西經四十五度は今回錘測した測點の最東であるが、彼のロス氏の錘測結果によりジョン、モーレイ氏發見の深溝存在は益々證認せらるゝ事と成つた。

探検隊は此の研究を終りて北方に歸り、レイ、ヒリツプ地のセイモール崎に到り此地に冬期滞在の根據地を構へ、駐在すべき委員は隊長ノルデンシヨルド氏の外にボドマン氏、エケルフ氏他に水兵二人である、ノルデンシヨルド氏は此地點より來春を待ち橋で南進する筈で、冬期南極號は殘餘の隊員一同を塔載し、南シヨルシア地とバルクランドとの中間を探検する筈であつた。

## ○瑞典探検隊救助の顛末

明治三十六年十一月電報は、ノルデンシヨルド探検隊一行は、亞爾然丁共和國の軍艦によりて、レイ、ヒリツプ地に於て救助せられ一同無事だと知らせた、同

探検隊は南極洋に滞在する中、南緯六十六度まで達したさうだが、南極號は隊の一部及びノルデンシヨルド氏をヒリツプ地上陸せしめた後、一時フオー克蘭ド及び南シヨルシアを探検し、再び探検隊員を歸航せしむる爲め南極に向ひ、同年三月テロル灣に於て冰山に衝突し、船体破碎遂に沈没したから、探検隊員は危険なる航海をなすこと十六日で、ポーレット島に着し同地に於て冬籠をなしたものと思はれる。

## ○同探検の結果（第四圖参照）

オット、ノルデンシヨルド氏の指揮せる探検隊事業の假報告は、明治三十七年倫敦地學雜誌上に公にされた、此探検隊は固より悲劇に富むが、其の結果は學術上既往の諸探検隊に比して遜色はあるまい、吾人が是れまで未檢の地方に得たる地形學、海洋學、水河學等の新知識は實に多大なるものである、特に地質學及び

南極探検船南極號

古生物學上の新発見は特筆すべきものだ。

グラハム地の東方に當り南緯六十三度より六十六度に亘る地域の全部は、今回の明治三十五年及び翌年の兩春期に於ける、ノルデンシヨルド氏の氷上横行卅五年末の探検船南極號の巡航探検、及び『雪丘』滯屯地點より探検隊の主部と相分れたるも、其の目的を達しない、レイ、ヒリツプ地の北西に於て、遂に越年した、ゾーゼ大尉の率ゐた隊の氷上横行によつて、新たに得たる吾人の知識は偉大なと云へる從來の該地の地形は全く其の形態を變ずるに至つた、其の発見事項中主なるものを擧ぐれば、第一に明治三十五年ノルデンシヨルド氏は、既にオルレアン水道とベルジカ海峡とが相連続せるものと唱へたが其の事實を確めなかつた、然るにゾーゼ大尉の探検支隊はベルジカ號探検隊の所謂ネイト岬と、アストロラベ島との中間なる一地方の測量をなして、此の問題を解決した、其の製圖に

依るとグラハム地の西側は頗る狭長な一水道をして、舊ツリニター島は不存在的なることを證明した、第二はノルデンシヨルド氏は、デュス氏の畧測圖を公にした此圖に據ると舊來地圖に示したグラハム地の地形に關する想像を變化した事が大きい、探検の初からレイヒリツプ地の西部はグラハム地と同物で、兩地は狭長な山地で續いて居る事を知つた、然るに今回の探検でグラハム地の東地に關する吾人の知識は又同じく著大なる變化を來した、即ちレイ、ヒリツプ地とグラハム地とは一條の山脈で續き、此の山脈には數多の深谷があつて、氷河が流下して居る、又此山脈は遠く内地に連亘し、一面氷を以て掩はれたる高原となつて居る、又此所には幾多の群島がある、此の群島はジョワンビル、ダンデーの二群島を始めとし、南東に進めばレイ、ヒリツプ地の東部に於ける分裂によつて、生じたる群島がある、此の群島は半圓形を畫せる、一水道によつてグラハム地と相離る、群

南極探検船南極號

瑞典南極探検船南極號

島の主部はヘツデントン山を戴ける大島を中心として形成して、山は火山質のやうだ、ノ氏は此の大島にロス島と命名せんと唱へた。

而してセイモール島及び雪丘も皆此群島に属するものだ、尙ほ南方の一群島はアドミラリチー水道及び雪丘の南方に散布して、此の群島を形成する島嶼は、リンドン、ベルグ、ロベルトソンの諸島で、オスカル二世地の前面に羅列して居るしかし此の地方には實際島嶼は存在しない、只高さ數十米の急峻なる氷塊があつて、深度比較的僅少な淺海底より聳立するものゝやうだ、此淺海底には火山質の諸山峯多く水中にある、此の氷塊は沿岩氷で廣大な區域に擴がり、探検員は此の氷上を百五十軒の距離間横行したから、最初は此氷塊を陸地性と豫想した、然るに此氷の如き氷地は普通の海水であつた、第二海洋學上新発見は南極號により、主としてブランスフィールド海峡に於て爲された、南極號は此の比較的深き

海峡の海底を錘測し極めて低温な水層の存在を發見した、此の水溫は氷點下一〇三度乃至一〇六五度で、後者は海底に接觸せる深層で觀測した、此低温度は是迄で海洋に於て觀測し得たる、深水層の最低溫度より尙ほ冷きものである、諾威海に於ける最低水溫は僅かに氷點下一〇四度に過ぎない、又南極地方海洋深水層も一般には氷點下一〇六度であるから、之に比しても前記の水溫は殆ど特例なることを知る事が出来る。

グナン、アンデルソン氏の研究によると、ブランスフィールド水道は孤立せる一海盆をなし、其の外洋と通ずる所には、海底に隆起帯があるから、海峡内の冷水は外洋の比較的高温な水層と相混和せざるは自ら明瞭なとの説明を與へた、又南極號はその巡航探検中、ミッドル島を搜索したるも遂に見當らず、其の位置とも思はれる所で錘測して深度一五〇〇米を得た。

瑞典南極探検船南極號

瑞典南極探検船南極號

第四は氣象觀測の結果に就て、精細な説明を要するは勿論だが、茲に大要を述べやう、其の觀測地點は南緯六十四度の所で、南極號は難破の爲め却て二ヶ年の久しき間觀測を繼續することを得た、探検中第一冬期は氣温甚だ低く、其平均氣温は氷點下十二度に達した、先年探検船ベルジカ號が此の地方で觀測した氣温の僅かに氷點下九〇六度なりしより推考すると、此の冬期が非常に寒冷であつた事は明かだ、其の原因は南西の寒風卓越せし爲で、又た此の卓越風に依つて、流氷はフランスフィルド海峡、及び、グラハム地の東部に著しく吹寄せた、南極號の破碎したのも亦此流氷吹寄せの爲めである、要するに、明治三十五年卅六年の冬期は非常に寒冷で、十一月は氷點下八度、十二月は氷點下一度八、一月は氷點下〇度九、二月は氷點下三度五であつた、夏期の平均は氷點下二度〇六で、ベルジカ號が觀測した平均氣温氷點下一度五よりも、尙ほ一層低温の様だ、斯の如きは實

に我地球表面上に於て觀測した、夏期の氣温中最低なるものである。  
 第五は探検事業中最も効果を收めたのは、化石の發見で、此の發見は實に其の趣味と嶄新な點とに於て、比類のないものである、明治二十六年船長ラルセン氏が、既にセイモール島に於て、松柏門植物の化石の破片を發見したが、同氏は化石を以て極地大陸沈積層の性質に關する疑問の解決に資する事が出来なかつた、ノルデンシヨルド氏は地質學者であるから充分の調査をなし、從來既知の玄武岩及び火山質凝灰岩の下部に含化石岩層の擴布せることを認め、此の岩層は主に砂岩で、ロス島の大部分コックバーン島及びセイモール、雪丘二島の全部を構成して居る、此の岩層中には化石の埋藏豊富で、其の下部の含化石層には、アンモン介を含むし、上部の各含化石層には他の海産動物の化石があつて、其の化石は多分第三紀の者であると思つて、ノルデンシヨルド氏は尙ほ其他に植物及

瑞典南極探検船南極號

瑞典南極探検船南極號

春索動物特に鳥類の化石をも採集した、又たゾーゼ、アンデルソン兩氏もルイ、ヒリツプ地の北東に於ける越年漂泊地附近で、保存完全なる松柏門、蘇鐵門、羊齒門等に屬する植物の化石を發見したが、此等の化石は既に此の地方と其の位置相反せる北極地たるスピッツベルゲン群島に於ても發見した所で、南北兩極地方では、共に著しき季候の變遷ありし事を知る事が出来る。

#### ○グラハム地の構造

オット、ノルデンシヨルド探検隊に於ける古生物學上の發見は、實に重要で南極古生物學上に一大曙光を放ち一新紀元を開き、珠羅期より第四紀に至る各地層の存在を知る事が出来る、アンデルソン氏はゲルラーシユ海峽航門の北東から、シヨワンピールダンデイ諸島に至るまでのグラハム地全部の地質圖を調製したが其の比例尺は五百萬分の一、百萬分の一、及び、二千萬分の一等の三種である、

是等の圖に依ると、第一帯は皺曲に富める山地で、一部分は水成岩より成り、大部分は逆發岩より成るもので、花崗石よりカスリ岩に至る諸岩石がある、南米マシエラン諸地の西部コルデラと密接な關係を有し、第二帯はロス、ベガの二島で、玄武岩凝灰岩の臺原より成り、岩脈の逆發及び玄武岩の流曳がある、海岸に向ひて峭壁を存し、臺上は氷を以て掩はれ、地層はグラハム地デニス灣の兩岸に於て之れを見るもので第三帯は白亞期及び第三紀層より成れるアドミラリチー海峽、雪丘、セイモール諸島がある、軟かき砂岩より成り氷河の生成には適せざるが如く、南極中夏期全く融解する唯一の地方で、コックバーン島は第四帯とも稱すべき特種の地層より成つて居る、以上はアンデルソン氏の地質研究により南米大陸の南角とグラハム地とは、地理學上及び地質學上同一の構造なる事確定せられた。

瑞典南極探検船南極號

## 佛 國

102

## ○佛國の南極探検

佛國は前世紀の中頃には南極探検に熱心に従事したが、近代更に其舉なきを遺憾として、一の佛國南極探検隊を組織し、經費三十萬フランの豫定で、公衆から募集し、尙ほ議會に一萬フランの補助を仰いだ結果、探検船ル、フランセイ號を艦して、明治三十六年夏期橋頭高く佛國旗を掲げ、先づアレキサンドル一世地指して出發した、明治卅八年二月のロンドン電報に依ると、曾てノルデンシヨルド氏探検隊を救助せる亞爾然丁共和國の軍艦ウルグアイ號は再び南極地方に向ひ、當時彼の地方にあつた佛蘭西探検隊の消息を知らむ傍ら、南海視察の命を帯び、明治三十七年十二月ボエノスアイレンスを出發した。

103

佛國探検隊最初の目的は北極探検にあつて、シャルコ氏が其の指揮者に擧げられた、然るに地理學會の助言によつて、最初の計畫を改めて南極地方に向ふ事となつた、故に該探検隊は極地探検事業の外に瑞典南極探検隊を救助せんと企てた、さればボエノス、アイレンスに着すると、ノルデンシヨルド氏の一行は、ウルグアイ號の船長イリザル氏に救はれて此地にあつたが、シャルコ氏はノルデン氏より南極地方の狀を聞き取り、又たノ氏の率ゐた數多の犬を貰ひ受け、直ちに南極地方に出發した。

シャルコ氏はノルデンシヨルド氏と會合の結果、多少其の計畫を變へたものらしい、それは先づバメル諸島の外ペリを調べてベルジカ海峡の南西を廻はつて、進んでグラハム地の西海岸をアデライド島まで探る筈であつたが、越年地點は此の海岸とし春期は探検を繼續し、越年地點からノ氏の既に探検をしたグラハム地

佛國の南極探検

の東岸、さては、亞歷山第一世地の陸績を發見するにある、かくて、夏期に如上の二地の内地を探検し、氷中に封せざる中即ち明治三十八年春に歸航する豫定であつた。

○シヤルコ氏の探検船

かくてシヤルコ氏の率ゐた探検船フランセイ號は、明治三十八年三月マドリニ港に歸着した其の探検事業は、主にワルデン島に試みられ、其の越年は科學上の諸調査を完全に施行する事が出来る、ビスマーク海峡問題も解決せられ、亞歷山地を發見したが、結氷の爲めに接近する事を得なかつたから、グラハム地の西岸を測量し、尋いてバルメール群島の北岸未探區域の海岸をも測量した。

要するに同探検船員が明治二十七年に越年したワンデルは、ウルビール氏の發見にかゝるルイ、ヒリツブ地の南西に延長したグラハム地の西岸ベルジカ水道の

南端にあつて、島の南は嘗て獨逸の捕鯨家デルマン探検隊の探検した海區で、當時グラハム地の西岸で深く陸地に進入した灣江を發見して、ビスマーク海峡と名づけた事がある、此の灣曲が海峡か又は水道かを調査したのは、フランセイ號の主要なる任務であつた。

○佛國南極探検報告

シヤルコ氏の探検隊が齎らし歸つた報告の梗概を見ると、海軍中尉レイ氏はワンデル島に於ける碇泊冬籠中の電氣觀測を公にした、其の結果に據れば、地球の兩極に及ぶに従ひ漸次地上の電場が衰弱すると思はれると云ふ事であつた、又同隊一行の地質學者エルネスト、グールドン氏は、採集した二三の岩石に就いて、ワンデル島で採集した結晶片岩の水河漂石三個を除くの外は何れも皆噴出岩である、而して之等の岩石は角肉花崗石、石英閃綠石、斑紋閃綠石の一群と、火山質

佛國の南極探検

佛國の南極探検

の微晶岩類で、其最新しきもの、一群島と二區分して居る、されど、此の地方に於て更に火山噴出の形跡を認めないと云ふ事である、此外動物學に於ても豊富な材料を得たのである。

北極探検

英國

○英國の北極探検史 附諸國

北極探検は英國航海者の常に熱望する所であるから、政府或は一私人の力を以てして、これが準備を企つる時に當つては、必ず數百に餘る志願者があつて、局に當るものは之れ等志願者の取捨撰擇に困難を感ずると云ふ盛況を現出するのである、中には多大なる金額を出して隨行の許可を得むとするものすらある、之れ所謂海國男兒は海に生まれ海に死する底の覺悟があるからである。

又聞く那威國で近時極地遠征の計畫があつたので、英國では北極探航者の一

英國の北極探検史



## 英國の北極探検史

人たる海軍大佐マルカム氏は此の一行に加はらむと欲し、政府に向つて賜暇を請願したと云ふ事であつた、一報は一報より更に益々英國民の海事思想の旺盛なる事を世界に向つて知らせて居る。

固より北極探検なるものでは、最近に起つたものでないと云ふ事は、探検史の證明する處である、即ち今茲に北極探検の歴史を案するに、往時英國に於て北極洋航海の企をなしたる者に、カボット、ウイローバイ、フロビツセルの數氏があり、尙之等數氏に先つて、北極探検者中最も有名なる者を擧ぐれば、往時にありては、デモン、ダビス、パーレー、ロツス兄弟及びフランクリンの右に出づるものなく、近時にありてはマックリユール、マックリントック、及び、ナールス合衆國のデ、ロング及グレイリー、澳太利のウエーブレード、及、バエル、瑞典のノルデンシヨルド氏を以て其の錚々たる者としなければならぬ。

又北極遠征の成績を見るに前後三回、其の四百里以内まで北極に近づきたる二回と北東航路を航したるとを以て主なる成績とする、而して北西航路を航したのは前後只一回ばかりである、即ち一八五〇年マックリユールの一行が白令海峡を経て北極洋に進入し、レソリユート號の救助を受け遂に之に搭じて英國に歸つた時斗である。

## ○北東航路の第一回

北東航路を航した二回の航海中、一六四八年デシニユー氏がコリマを發してアナジル海灣に達せし(此時同氏は少しも氷に)を出逢はざりしと云ふを以て第一の航海とする、而して往時の北極探検者中で最も功を奏した者は、エリザベス時代の老航海者デヨンダビス氏である、氏は北西航路搜索の爲め三回航海を爲し、第三回目の航海に於て、其率ゐた二隻のバーク型船、及一隻のクリンカー型船と共に、北緯七十二度十二分

英國の北極探検史

の處まで達する事が出来た、其時氏は九日間グリーンランドの海岸に沿ひて危険なき海水中を航したが、風向北に變じたので、氏がサンダーソン、ヒス、ホープと命名したる岬角の近處で、其の海岸に遠ざかりし西の方渺茫たる海に向つて百二十里を帆走した、氏が此の航を終へて歸國するに及び、其の雇主に送れる左の書翰を見る時は、氏が深く北西航路を發見したる事を信じた事が解かる。

拜啓、遷生及乗組員一同は、上帝の大慈大悲なる加護に依り無事歸國仕候。扱今回の航海は出發前の豫定よりも百八十里遠く進航仕り、七十三度の處まで達し候得共、其の海面には少しの氷も無之、又た陸と陸との間さへ其の距離は百十二里に有之候へば、北西航路の存在する事は最早毫も疑ひ無之、又た之を航行することも實に容易なりと相信じ申候、昨十五日當所へ上陸致し候へ共、遷生殊の外疲勞仕居候へば、貴下何卒書狀の簡單なる事情宜しく御諒察被下

度先づは右御報知迄如斯に御座候也

在 サンドイツヤ

千五百八十七年九月十六日

ジョンダビス再拜

サンダーソン貴下

北極探究の史乘に於てジョンダビスに次ぎて有名なる者はフランクリン氏である。

○北極探究家フランクリン氏

氏は初め少尉候補生となりてコッペンハーゲンの戦に出で、次で南極探検隊に加はり、其の歸途に於て難船の不幸に遭ひ、其後夫の支那艦隊を編成せる東印度會社の商船隊が、佛國の分艦隊に出會ふて之と戦ひ、遂に彼を追ひ散らして、海軍史上に光輝を添へたとき、氏は該商船の一に乘組みて此大戦争に與かつた、夫

英國の北極探検史

## 英國の北極探検史

れより氏はトラファルガー派遣のベルロフオン號の少尉候補生となり、信號を掌れるが其後ドロゼア、トレントの兩號と、イサベラ、アレキサンデルの兩號とが相分れて一隊はスピッツベルゲンを經一隊はダビス海峡を經て、北極遠征を企てた時、氏は大尉となりトレント號を指揮して、初めて北極探検に従事したり、尤も此の一行の士官中には後來北極探検に關して名高くなつたバレー、ロツス兄弟、ブーチヤン、ピーチー及チヨージバックも加はつてゐた蓋し此行を以て近世北極遠征の第一着とする、此時ドロゼア、トレントの兩號はスピッツベルゲンを經て北航し、僅かに八十度三十七分の處に達せしのみであつたが、他の二船（ロツス及バレーの指）は、スミス浦の入口に達し之を水門なりと決定して歸航した、而して又たロツスはランカスター浦に到つた時も、此浦を以て一山脈（ロツスは此山をクロ）に圍繞せられたる灣なりと決定してゐたが次回の航海に於てバレー氏（此時氏は船

はプリンズレゼント水門ウエーリントン水道コルンワリス島バサルスト島及メルピール島を發見し遂にランカスター水門に入りて冬を過ぎ翌年北ソモルセツト及北デポーを經て歸航した、バ氏が此の航海を爲した時フラクリン氏はバ氏に協力せんが爲め、陸地遠征隊を作りて自ら之を率ゐ、エンタープライズ砲臺を本據として北極行を企てたが、此時氏及び同行者の嘗めた艱難辛苦は實に言語に絶する程であつた、乃ち一行は晝夜兼行して、一日も早く本據のエンタープライズ砲臺に歸らざる可らざるの危急に迫り、孰れも非常の勇を鼓して進むだが、糧食既に竭きて日々飢餓に迫るの情況であつたから、足の歩みも捗らず、或は路傍の苔を嘗め、或は草木の葉を食し、僅に露命を繋いで進行し、遂には己れの穿つ所の靴を脱ぎて之を食ふと云ふ始末に成つた、斯くて此の萬苦を忍びバ氏及他の二名は辛ふじて先づ砲臺に着したが、悲ひ哉砲臺は無人の屋と變つて居た、そこ

## 英國の北極探検史

## 英國の北極探検史

で彼等は他に詮術なく、芥溜の中から魚或は禽獸の骨を拾ひ取り、之を碎いて食料とし、僅に其命を繋いで後れた者を待つてゐたが、遙に後れてドクトル、リチャードソン、と他の一名は歸つたが、其他の者は皆途上で蠻民のために啖殺されたと云ふ事である。

## ○パーレー氏の遠征

一八二六年より同七年に至る間のパーレー氏の遠征は、スピッツベルゲンを本據として、楢行で北極に達する目的で、一行の人々或る時は楢舟を山上に曳き上げ、或る時は之を水中に下ろし、千辛萬苦を経て進み行きしに、大雨が降り續いたので、氷上を歩行すること困難となつた、されど此行八十三度の緯線に達すれば、千磅の賞金を得らるゝ筈であつたから、如何にもして同緯線まで到着せんと欲し、日中は太陽が氷に映じて眼を射る爲めに之を避け、且つ少許の暖味を便り

に晝は寝ねて夜起きて奮進した、然るに今日は撈取つたと思へる日にも、僅かに五哩の北行を爲し得たるに過ぎず、其他の時に在りては二十三哩を歩みて北進した行程の僅々一哩に過ぎない事もあつた、尙ほ甚だしきに至つては十一哩を歩みたるに、何ぞ圖らん、出發地より却て三哩退き居ることさへあつた、されば一行の人々も、斯かる次第で到底其の目的を達する事が出来なかつたから、八十二度四十五分の地に達するの後遂に歸國したが、夫れより多年間此の緯度を超へて北進するものは出なかつた。

## ○ロツスの北極再探検

一八二九年ロツス氏は再び北極探検の爲めに出帆したが、此行の費用はロツス氏の友人フエクリス、ブースと謂へる醸酒家が之を負擔し、前金としてロツス氏に一萬七千磅を給與した、そこでロツス氏は自己の乗船としてヴィクトリー號を

## 英國の北極探検史

撰むたが、此船は英國に於ける最も古い遠洋汽船の一で、是迄多年通商の爲め愛蘭と英吉利の間を往來した船である、ロツス氏は其の機關及汽罐を遠ざけて全く之を帆前仕立となし、甥のヂエームス、ロツスを伴ふて出帆し、進んでプリンスレゼント澳に入り、プーシア、フェクリスと謂へる陸地の濱邊に止まつて其冬を過したが、此處に滯留中ヂエームス、ロツス氏は北の磁極を發見した、夫れより此一行は氷中に於て四冬を費やした後、老船ヴィクトリー號を乗捨て、端舟に乗つて氷なき所に達したが、不思議にも先年ロツス氏が乗捨てた所のイサベラ號に端なく出會つたから、一同之に乗り移つて無事に歸國した。

前の航海に次ぎて貴重なるものは、夫の不幸なるエレベス及テロル兩號の航海である、此の兩號の行衛の知れないところから毎年之が搜索の爲め遠征隊を派遣したから、遂にマツクリントンツク及ラーエの一行に依り、兩號が悲しき最後を遂げ

たことを探知した、茲に又た記載するに價値ある一事があるそれは兩船搜索の爲め遠航した船の中にロバート、シーデン氏の所有に係るヨット船があつて始めて北極洋に達した一事である、此船は即ちナンシー、ダウンと號し、嘗て世界を一週した事がある、又たフランクリン氏に出會ふ爲め、ベーリング海峡を通過して政府の搜索船に出會つた事があると云ふて居る。

如上の遠征は大に北極洋の水路に關する吾人の智識を増進し、就中北西航路の存在せることを證明した、尙ほ以上の遠征後も、許多の遠征があつて種々の發見をしたが、是等は皆英國以外にて舉行した所のものである。

## ○英國以外の遠征

英國以外に舉行したる遠征中、先づ記載すべきものは米國で企てたケーン及ホール兩氏の航海である、殊にホール氏は船舶の達した事あらざる高緯度の處まで

英國の北極探検史

## 英國の北極探検

行つた、蓋し此の高緯度までの進航は爾來今日に至るまで、唯チヨージナルス氏の指揮したアラート號一隻のみである、而して其の遠征はホール氏航海中に死んでから、氏に代りて船を督したる人物歸途少しく狂氣し船の氷に閉さるゝを恐れて、臥具及食糧等を氷上に投出し、己れも亦周章て、氷上に飛び下つた、而して其時俄かに氷と船との間の隔離したので、彼は遂に船に歸ることが出来ないで空しく氷上に取り残されたが、後幸に海豹捕獲を業とせる汽船タイグレス號の救ふ所となつた。

## ○次の貴重なる遠征

次の貴重なる遠征は一八七二年澳國に於て企てた遠征である、乃ち此遠征隊を督せる大尉ウエーブリーク氏は、同年八月二十日テゲツツ號に搭じて澳國を發した、而して該號は或日其隨行船のイスブジョイン號と分れて唯獨り進行したが

其日の午后ノバヤゼムリアの海岸附近北緯七十六度二十二分東經六十三度三分の處で氷に閉ち圍まれ、百方手を盡したが遂に其間を脱出する事が出来なかつた、かくて此行は到底成功の望なかつたが、此の遭遇せる不幸は却て新陸發見の媒介となつたのが不思議である、即ち一八七二年の秋より冬に至るまで、テゲツツ號は氷に圍まれて其中を出づる事が出来なかつた、唯其行く處に任せて漂つたが今にも船体は碎ける事かと乗員一同安き心もなかつたが、翌年八月三十日に至り、俄然濃霧の散じたので人々思はず四顧すると、圖らずも船首に維石巖々たる高岸の聳へ立つのを認め、而して其の時船は尙ほ氷に伴ふて漂ひ行き遂に該陸地に接近したが、時方に冬であつたから測量を爲す事が出来ないで、翌年三月まで此處に滞留したが遂にジチイ及ウイルクゼツクと名づけたる陸を發見し、且つ船首に方りて、後世ベーターマン、ランド及キング、オスカルランドと命名したる二

## 英國の北極探検史

陸地を認め、そこで乗員一同本船を捨て、端舟を數臺の橋に載せ、其上に乗つて同處より歸途に就たが、固より浮氷に逆ふて進むのであるから、其の困難は實に筆紙に盡し難く既に二ヶ月を経過したけれど、尙ほ本船を遠ざかること二獨逸里を超えなかつた、幸にして早く無氷の處に出でたから、直ちに端艇を浮べ之に乗りて更らに一ヶ月間進行し、遂に北緯七十七度四十分の高緯度の處に於て氷堤に達したから、一同は茲に始めて安緒の思をした、程なく露國のスクーナー型船二隻に出會ひ一同之に乗りて歸國した。

## ○特筆す可き遠征

前の遠征後特筆す可きは一八七五年、英國に於て舉行した遠征、即ちジョージナールス氏か二船を率ゐて發したる遠征である、二船は無事にスミス浦を發航して些少の困難もなく極めて高緯度に達した、而して其の一船デスカバリー號は冬

籠の爲めレデー、フランクリン灣に止まつたが、地の一船アラート號は益々進むで、先きにボリス號の達したるよりも一層高き緯度に達し、四方露開せる海岸で氷に出會つたが、幸に其位置は冬を過すに便であつたが、乗組一同此處に冬籠して、さしにも長き北極の夜を無事に暮らし春に至て探検隊を編成し、大尉アルドリッチはグリーンランドの北及西に於ける長海岸一帯の測量に、大尉ピエーモントはグリーンランド海岸一部の測量に従事し、又たマルカム、パールの兩大尉は端艇及橋を以て北極に向ひて進行した、然れども右兩大尉の一行は其の目的を達することが出来なかつた、何となれば此の一行は是迄船舶の到つた事のない最高緯度北緯八十三度二十分二十六秒に達したれども、同行者中に敗血病に罹れるものがあつたから、該緯度を限りとして歸つたからである、是に於て船長パール氏は尙ほ一冬を此處に過すも差した益がないと斷定して歸國した。

## ○記憶すべき遠征

之に次で最も記憶すべき遠征は、瑞國船ヴェガ號の遠征である、此の遠征は大尉パレンダー之を指揮し、有名なるノルデンシヨルド氏嚮導者となつて同行したものであるが、目的は主に西比利亞のオビ、エニセイの兩河と、歐州の諸港との間を海路より交通することを得べきや否やを確定するにあつたノルデンシヨルド氏は屢々瑞典及露西亞の北に横はつてゐる諸海を航行し、又たスピッツベルゲン及グリーンランドに五回の航海を爲し、且つ二回カノ海を通航せし人、始めから氏は北極洋は季節に依つて航せられるから、此の遠征の目的を達すること決して難からずと確信した、去ればヴェガ號は一八七八年七月那威を發し、同月下旬カラ海に入つたが未だ此海には氷を見なかつた、夫より八月十九日亞細亞大陸の最北角北東岬を繞り、九月廿八日には白令海峡を距る二日路以内まで到つたが、

不幸にも此處で北風吹き始まり海水氷結したから、已むを得ず此處に二百十四日間滞留し、翌年七月十八日氷の融解するを待つて再び發航し、同月二十日亞細亞大陸の最東角東岬を通過し、夫れより程なく横濱に安着した、實に此の遠征は乗組人員中一人の死亡なく又一人の健康を害せし者なく、且つ船体に些少の損害を來さないで安全無事に北東航海を爲し遂げた。

ヴェガ號の白令海峡を通過せしより凡そ一ヶ月を経て、又た一の遠征船があつて、同一の航路を取つて北極洋に入つた、此の遠征は米國「紐育ヘラルド」新聞記者ゼームスゴルデンペンネット氏の發起に係るものであるが、同氏は平素から船舶で北極に達し得べしとの説を持し遂に米國海軍少佐デーロング氏に勸めて、此遠征を起さしめた、去ればデーロングは充分に積装して米國を發し、一八七九年八月二十八日を以て白令海峡に入つたが、九月五日には氷の爲めに大に妨げら



れ進行抄取らず、而して九月七日に至り船遂に氷の爲めに圍まれて再び出づる事が出来なかつたが、夫より後は氷に伴ふて所々を漂流せしに一八八一年五月十六日に至りて一の新陸を見た、然るに六月十三日に至り、船遂に破壊して沈没したから、乗員一同端艇又は橋に乗り移り七月二十八日海岸に上陸し之をペンチット島と名づけた是ぞ該號が白令海峡に入つてから滿二ケ年目であつた、夫れより一同は八月三十日ニューサイベリヤ列島に達し、九月十二日レナデルタに向つて出發したが翌日颶風に會つたから、端艇四方に離散し、一隻は遂に行衛知れず而して機關長メルビル氏の擔任せる端艇は安全に濱に乗り揚がつたから、其の一行は恙なく殖民地に達した、又た、少佐デーロングの乗つた端艇は安全にレナデルタに着いたが、寒威の劇しきと食料の乏しきとに由り、デーロング氏を始めとして過半死亡し生き残つたものは僅に二名に過ぎなかつた、去れども少佐デーロングは

死するの日まで一日も怠らず日記を記した、デーロング氏一行の死体は一八八二年の春に至りて之を發見した

此の遠征後二年を経過し即ち一八八四年に至り合衆國陸軍大尉グレーリーの指揮せる遠征隊があつた、此の遠征は不幸の終りを遂げられど、北極に關する吾人の知識に最も貴重な増加を爲せしのみならず、米國に最極北の令名を得せしめた。

### ○グレーリーの遠征隊

一八八一年八月十一日グレーリー氏は、合衆國陸軍の兵士より編成した一分隊と共に安全にレデー、フランクリン灣に入つて上陸し、出發の際持ち來りたる木材等を以て一の家を建て、乗員皆此處に住居して日々學術上の觀測其他の業務に従事した、抑々此の一行は二年間を維持するだけの食料を貯へて行つたので、

## 英國の北極探検史

右年限内に米國政府から船舶を派出して食料を送るべき筈であつたが、既に二年を経過するも其船到着しなかつた、是に於てグレーリー大尉は、豫ての訓令に従ひ同處を引き拂ひて歸航の途に就いたのは一八八三年九月であつた、されば探究に従事せしことは僅々二ケ年に過ぎなかつたが、其の成績は實に偉大であつた、即ち大尉ロックウッドは伍長ブライナー及一名のエスキモーと共に一挺の犬橋を用意しグリーンランドの海岸に沿ひて北東方に進行し、遂に北緯八十三度二十四分の地に達し、同所に一日留まり實測探検を施したのである、爾時該一行が食料の充分ならざりしより尙ほ遠く北行する事が出来なかつたのは頗る遺憾な事であるが、其の陸地は遠く北東方に曲折してグリーンランドの北角近處とは更に思はれなかつたと云ふ事である、又此一行は北緯八十三度以北の地に於て野兔及野鶏各一羽を獵殺し且つ旅鼠、狐及熊の足跡あるを見たるのみならず、スノーバン

チング鳥の鳴聲をも聞いたと云ふ事である、斯くロックウッド大尉の一行が北方に進行した間にグレーリー大尉等は先にグリーンランドの内地を探検し、萬事好都合なりしにも拘はらず最も恐るべき不幸を以て其局を結むたのは悲しい事である、蓋し此の不幸を來たせしはグレーリー大尉の罪でない、實に米國政府が救助船の派遣期を遅延したからである。

## ○グレーリー大尉の悲劇

乃ちグレーリー大尉の一行は一八八三年九月リーダー、フランクリン灣を出帆し既にスミス浦を航下したので冬籠の準備を爲すこと必要となつたから、已むを得ず本船を乗捨て、千辛萬苦の後辛うじてサビイン岬に上陸した、依て持ち來つた鯨舟を屋根として一の小舎を作り僅かに嚴冬を過ごしたが、翌年の一月に至り一行の者次第に死亡し救助船の到着した頃には全員の過半死亡し生存し居た者は僅

## 英國の北極探検史

英國の北極探検史

かに七名のみであつたと云ふ事である、思ふに此の七名の者も救助船の到着今日遅かつたら必ず鬼籍に入つたであらう、茲に派遣せられたる救助員の實話を左に記載すれば、古來幾多の探検家が遭遇した艱難困苦を想像する事が出来る。

一八八四年六月の或る日曜日、グレーリー大尉一行の冬籠したと云ふサビイン岬に着すれば、地は荒寥寂寥として寒氣肌を刺し其物凄じきこと云はん方なく、前面は海で北方は一面に氷塊浮び、背後は岬々たる岩山險立して氷田其間に充滿し、一側は斜で粗末なる墳墓所々に散在し、他の一側には一の小舎あるも寂として人なく、而して此の小舎と前きの斜との間にいとも哀な天幕があつて其中に遠征隊中の生存者を認めた、然れど彼等は孰れも寒さと飢と苦痛との爲めに半ば死んでゐた、又該斜の麓にはスニードー氏の屍があつた、是れ四日前に死んだ屍なるも他の人々皆弱はり果て、之を埋むるの氣力がなないので其儘捨置いたものである。

である。

夫れよりコルウエル大尉は天幕の煽りを防ぐ爲めに置いた石を取り除けて幕中に入らんとし、其入口の傍に當り頭を外側に向けて座し居りたる人を認めると、其人は眼据はり顎垂れ手足動かす實に生きた人とは思はれなかつた、而して其對側に又最も哀れな人の居るを視たが、此人物は確かに生て居たが手もなく足もなく右の腕頭に一の匙を縛り着けて居た、思ふに是れ冷瘡の爲め手足皆腐脱して今まで他人の養ひを受け居たるものであらう、斯くて幕の中央には二人座り居たが譏談徳利より、水を錫の皿に注ぎ入れんとするの樣子がなかつた、而して又其直ぐ前面に俯向いて座はつてゐた一人がある、身に垢付いた襦袢を纏ひ頭に赤色の兜頭巾を戴き鬚蓬々と生ひ眼光炯々として如何にも物凄じ人物であつたが、此人コルウエル大尉の入るを見るや少しく身を起して眼鏡をかけた、是に於て大尉は

英國の北極探検史

英國の北極探検史

足下は誰なりやと問ふたが、彼は何の答もしないで只此方を凝つと見もつた、斯くて大尉が再び足下は誰かと問ふた時、傍に居た生存者の一人は之に答へんとし、彼の人は大尉……大尉グレイリーとヤット發見し得たが、コルウエル大尉は之を聞くや否や直ちに這ひ乍ら其傍に到つてグレイリー大尉を抱き、子はグレイリー君なりやと號むだ、グレイリー大尉は少しく猶豫したが如何にも細き聲で『然り然り、我々七人残つた、此處に我々は殆ど死に臨みつゝある、余は爲さんと欲せし事を爲し遂げた……余は充分成功した』と答へた、以て探検の困苦を窺ふ事が出来る。

○北極探検年代

本書に記載せんとする北極探検記事は、今世紀に於て有名なもの斗であるから歴史中最も名高きものを掲ぐれば左の如し。

西紀	探検者	到達緯度	北極よりの距離
一五九六	パーレンツ	七九・四〇分	七二三哩
一六〇七	ハドソン	八〇・二三	六五四
一七〇〇	ヒツプ	八〇・四八	六三五
一八〇六	スコレッツビー	八一・三〇	五八七
一八二七	パーレー	八二・四五	五〇〇
一八七六	チーヤ	八三・二〇	四六〇
一八八二	グレイリー	八三・二四	四五五・半
一八九五	ナンセン	八六・一四	二六一
一九〇〇	アブルツデー	八六・三三	二三九

一五九六年パーレンツが探検は北極を距つること尙七百十三哩の所であつた、

トール男爵の探検

其後前世紀末年まで實に三百四年間前後九回の大探検があつて、其の北極に近づけること四百七十四哩の間隔がある、遂にアブルツヂ公が北極より二百三十九哩の地點に達したので、第十九世紀は終りを告げた、知らず二十世紀の末年迄には極北區域は如何に開拓せらるゝであらうか。

露西亞國

○トール男爵の探検

魯國のピーター大帝は、一七二五年より翌年に亘れる白令海遠征の際、其の將さに死に垂んとせるにも拘はらず、自筆の訓戒を與へて能く之を獎勵せる事は世人の能く知る所である、露國は同大帝の遺訓を奉じ北極探検につきて亦全力を盡くした、茲にトール男爵の探検並に其他を叙せん。

新シベリヤ群島探検に名も高き同男爵は明治卅三年夏期ピーターズブルグ帝國科學院の保護を受けて、北極地方探検を遂る計畫をした、男は地質學に通じ、測地學、氣象學、海洋學、動物學、星學磁氣、醫術に通せる人々と共に、探検隊の人員約二十人ばかり。

汽船曙號は六月の初旬露都を發し途をカラ海にとりチエリウスチーヌ岬を廻り男の意見によればカタンガ海灣の北なるタイムール半島の東岸に於て冬籠をなす目論見で、元來此シベリヤの北岸は未だ充分探検せられず、又宏大なるタイムール半島の如き、未だ曾て探検したることなき地方であるから、當時の探検により有益な、新發見の續出したことが多い、明治卅四年を期し新シベリヤ群島の方に進み此所で第二回の冬籠をなし、夫れより同群島の北西に當り當時に至るまでは存否不明なサンニコフ地を探検する目的で、明治卅三年に到りベーリング海

トール男爵の探検

## トール男爵の探検

峽を経て浦塩港で探検を終らんとする企であつた。

其後帝國科學院は男爵よりの電報に接したが、該電報は八月七日探検隊はユーゴルチャル海峽の入口に到着し今僅少の氷を海面に見る海峽通航には最良時期であると、かくて、探検隊は即日カラ海に向ひエニセイ河口のポート、デックソンを訪ふ計畫であつた。

## ○曙號の氷中閉鎖

其後男爵は露都の帝國地學協會に宛て其明治卅四年に於ける探検の模様を報告して曰く、曙號は八月二十五日まで氷中に閉鎖せられしが、九月一日に至り漸く海灣を去つて外洋に出でたが、當時海上には全く氷影なく航海自由であつた、シエリウスキン岬を廻りカテルニイ島附近から船首を北東に轉じ、北緯七十七度九分東經百四十度の所にて氷の爲め一時航行を停止したが、十一日に至り氷再び開

けて船はベンチット島附近に達した、同島は全然白雪の山地より成り山腹に懸れる氷河及び溪谷を目撃し、尙曙號は氷塊の障壁に沿ひて進み、北緯七十七度二十二分、東經百四十二度の所に至りたるに、歸航の必要を認め一先づカテルニイ島に引上げ二十四日本船は西海岸に近くチンビシヤ一灣内にて又もや氷中に封せられ居たが、此處にて男爵は恰も本國より補助探検船として特に派遣せられたフオロソウイツチ氏の一行に會合し、狂せん許りに打喜むた、曙號の探検より得た知識の一はサンニコフ島の不存在である、該島はヨシ在りたりとするも從來の位置よりも遙か北方に位するであらう、同號は圖上に於ける同島に船首を向けて航したが更に其の片影だに認めなかつたと云ふ事だ、又ノルデンシヨルド海即ちシエリウスキン岬と新シペリヤ諸島との中間に於ける海區は凍氷なく、其水温はレナ河三角州の北沖に於て三〇二度であつたと云ふ事だ。

## トール男爵の探検

## トール男爵の探検

## ○トール氏の行衛搜索隊

明治卅七年一月の新聞に、新シベリヤ島并にベンチット島に於てトール男爵を搜索せしも其効なく、男爵の遺せる書によつて察すると明治卅五年十一月ト氏は南方に向へるもの、如しと載てある。又明治卅八年四月の倫敦地理學雜誌の記す所に據ると、トール男爵の統率した北極洋新シベリヤ群島探検隊は遂に全滅に歸したる旨露國某委員から通牒があつたと云ふ事だ、初め地理學協會の會員レユニオン氏外數名はトール男爵探検隊搜索のためコルチャック大尉指揮の下に別に一隊を組織し、同大尉は捕鯨船に乗じて先づカテルニー群島の沿岸を測量した後ベンチット群島迄で進行して、トール男爵の所在を求めたるも得ず、同大尉の一行捕鯨船隊は久しく歸り來ないから、搜索員たるオレンテン氏は、遂に同大尉の不幸中途で死去せるに非ざるかを疑ふに至つたが、ベンチット群島探検中今日に至るまで

一人も無事歸來したもの、ない事實は遂に之を信せしむるに至つた、然るに超えて八月中旬コルチャック大尉はトール男爵の遺書を携へて無事カテルニー群島に到着し、其搜索次第の報告をした、其遺書によるとトール氏の一行は僅かに十八日間乃至二十日間の糧食を殘せる儘尙ほ探検すべき旨を記載してあつた、之れによつて同男一行は不幸にも餓死して極北の鬼となりしを確むるに到つた次第である。

## ○トール山の萬年雪

ベンチット島は新シベリヤ島の北東にある、島は二等邊三角形をなし面積約二百方軒北東及び南東は海岸の地勢複雑して二個の半島を作つて居る、山脈の主なるものは二ある、一はロング山と云つて高さ五百米突一はトール山と稱し島の北東及北部を占め、傾斜急なる一條の山脈を成し、其間には深刻な數多の谿谷及雪

## トール男爵の探検

## トール男爵の探検

原があつて暖流の排出をして居る、此等の水流の海に注ぐ處は上陸し得べき地形を成すと雖も、他の部分は概して海上に沿ふて峭壁をなし、海岸の砂濱は狭長で氷を以て蔽はれ其上を歩行する時は、往々溪流を渡渉する場合がある。

南海岸に於けるトール山の万年雪は、トール男爵の手に成れる記録によれば男爵も亦之を氷河と認めず、常に万年雪なる語を以てして居る、万年雪は氷よりなれる峭壁で形成せられ、其の最西は幅約一軒にして其端は海面に達し、高さは中央部に於て平均二米であるが、東端に於ては十五尺に達して居る、何れの處に於ても判然たる凍氷を見ないのは實に純然たる大氷河には見得べからざる所で、島の東には高さ百五十米の丘稜存在し、表面は不毛なるツンドラより成り、此島に於ける現今の動植物群は極めて稀で、白熊、膾炙、三十有餘の馴鹿及海禽類あるに過ぎない、獸類斯の如く少きを以て、男爵は到底久しき滞在中の食料を

供給し能はざるに心付き、此島を踏査した後南方に向ひて出發し、遂に其の行衛不明に終つたものゝやうだ、コルチャツク氏が男爵のもと住ひし小屋の中に得たる遺物は、野篋、機械類、岩石標本等であつた。

## ○カムチャツカ探検

其一の露人リアプーチンスキー氏は自費を投じ、露國地學協會を協同して、勘察加に向ふべき一大探検隊を組織し、明治四十一年五月上旬に露都を出發した同探検は地理、植物、動物、氣象、及び人類の諸部に分ち、總て廿名の學者より組織せられ、約一ヶ年半の間同半島に滞在する豫定であつた、特に人類部員は初めアリエーション及びベーリング列島に到り、明治四十二年の秋までには漸次勘察加の探検に歩を進むる豫定で、其の探究一部の目的は昔時住民移動の古跡を尋

## カムチャツカ探検



## カムチヤツカ探検

ぬるにあつた。

其二は露都なる帝國科學院に於て此程一の探検隊を組織し、レナ河三稜州のブールン村落附近に新たに発見せる古象の遺骸を採集せん事の計畫である。

明治四十一年三月十五日同院の報告に依れば、此の探検隊の指導者はフオロンウイツチ及びビチエンマエル二氏で、既にトール男爵の発見した古象の遺骸組み立てを以て世に知られた面々である、該探検隊が主要事業は第四期前に於ける古象の埋没せる地層の研究で、遺骸は其の柔かき部分、殊に腸胃の如きものに至るまで、レナ河の可航季節を利用して、悉く最近の鐵道停車場イルクーツクに持ち歸る豫定であつた、尙フオロンウイツチ氏はリアコフ島を調査して、曩に古象を發掘した地層と此島との地質學的關係を研究し、それからエナ河北東の地方を探検すると云ふ事であつた。

## ○露國の北海探検船

又過般露國の子ウスキー造船所で軍用運送船タイムイル號の進水をしたが去る明治四十二年六月にも亦同型の軍用運送船ワイチアチ號の進水を行つた、此の新に建造せられし二隻は、専ら北氷洋航海の目的を以て建造された運送船で、此の二艦は西比利亞北岸の航路探検に用ひられる、此の二艦の設計は運送船なるも船型は碎氷船であるから、氷塊の強大なる衝突にも堪へられる、且つ建造上特に注意したのは、酷烈なる嚴冬の北極に越冬を爲すに適する構造をなして、船員の居室には皆何れも特別な覆物がある、今日に至るまで鐵製の船舶で北氷洋に冬期越冬した汽船は未だ一隻もないから、鐵製の船舶を以て冬期越冬の目的を豫定したのは、實に此の二船を以て嚆矢とする、此の兩艦を以て露國が西比利亞北岸の航海を試み、好結果を得たら北海の航運に一新紀元を開くかも知れないと云ふ事

## カムチヤツカ探検

## ペアリーの北極探検

であつたが、杳として其後の消息を知らない。

如上主として極地探検を叙したが、總じて露國探検熱は盛にして數年來夏季に際して探検隊を四方に特派し、昨夏も既に多數の探検隊各地に出發した、各探検隊の目的地は主として中央ロシア、烏拉爾、西比利亞、黑龍江沿岸方面で、部隊數は四十に達した、以て其の探検思想を窺ふ事が出来る。

## 米 國

## ○ペアリーの北極探検 其一

明治三十四年に於ける此國の北極地方探検は概して不成功であつたが、ペアリー氏の探検は實に好結果であつた、氏の探検は夫人並に令嬢を同伴したが、凍氷のために冬籠をすることゝなつたので、明治三十三年四月同氏は其の冬籠の塲所

シミートランドなるエタから、黒人の僕ヘンソン並にエスキモー五人を従へて出發し、氷州の北西岸に沿ふて北進し、五月八日には嘗て有名なロックウッド及びブライナルド兩氏が悲惨な最後を遂げた地點北緯八十三度二十四分に達した此の地點は實際北緯八十三度三十分二十四秒で、夫れから尙海岸に沿ふて進行したが北緯八十三度三十九分に於て、海岸は俄かに東行に屈折し、八十三度五十分に至りて一の水帯に出逢ひ、餘儀なく其進路を變じて、綠州の海岸まで來り東方インデペンデンス灣に到り、此處で前回の途筋と合し歸路綠州の北海岸に沿ふてケンチデイ海峽に達し、北緯八十二度フォート、コンチエーと云ふグレーリー氏が會て冬期滞在した所に冬籠し、明治三十四年再び北極に向て楫行を企てたが人夫犬に不足を來したので、終に目的を果さないで、當時サビヌ岬に於たウッド號は歸航した、明治三十三年に於ける同氏の探検は其得る處大にして、始

## ペアリー氏の北極探検

めて、縁州が一個の島地たることを證した、且つペアリー氏は亞米利加の北極諸島中にて最も北極に接近せる島嶼に達することが出来た。

## ○次の報告

ペアリー氏は明治卅四年八月エリク港を出發し、九月中旬にはサビヌ岬より程遠からぬベイヤー、ハーバーに達し此所で越年した、然るに間もなく此處にて隨行せるエスキモー人中に悪疫起り壯年者六人と小兒一人の死者を出し、ペアリー大尉は不得已他のエスキモー人をエタから招き翌年三月初旬再びフォート、コンヂエールに向ひて出發し、更にヘクラ岬の方向に進むた、而して此處を以て北方遠征の起點とし、四月一日ペアリー氏は其の從者ヘンソンの外にエスキモー人四名機六臺と共に此地を出發した、沿道絶えずナレス海の舊氷中に新氷帯あるを認めたが、夫れより氷なき海面があつて氷塊の浮游するを見た、此の分離せ

る氷塊は氷原の壓力を受け、進むに従て益大となり、進行に困難を感じた、加之濃霧常に空を蔽ひ殆んど太陽を見るの日なく、北緯八十四度七分に達したるに遂に一行は目的地を後にして、一先づ引き返すの已むなきに至つた、ヘクラ岬へ四月二十九日、フォート、コンヂエールに歸着したのは五月三日、其後五月六日更にコンヂエールを發し同十七日サビヌ岬を過ぎて北に向ひ、行程數日でルイナボレオン岬に達し、遂にドツピン灣の測量を補足した、而してペアリー氏の歸着したのは六月で、八月更らにベイヤー、ハーバーよりウインドワード號に乗り九月十四日チョーテン灣に安着した、尙ほウ號は歸航の際、以前グレイリー探検隊がコンヂエールに取残し置きた北極に關する圖書類、クロノメートル、器械類、博物學上の標本等を持ち歸つた。

從來同氏は北極地方探検に身を委すること爰に十有餘年極北に於ける事業は甚

ペアリーの北極探検  
 だ重要である、即ち緑州の島地なる事を紹介し、其の北海岸の地圖を製し、其の群島を明瞭にし、其他同群島と北極との中間には、多分水を以て掩はれた海洋あらむと主張し、又緑州北西岸の沖に散布せるグラントランド、グリーンネルランド、エレスメール地等の確實なる測定を爲せるのみならず、北緯八十四度十七分の地點に探及したるが如き、又數年間エスキモー人と寢食を共にして之が研究をなしたるが如き、或は北極地方の動物及び地質氣象に關する智識を進めたるは主なるものである。

### ○ペアリーの北極探検 其二

明治三十八年七月ローズベルト號は諸般の準備を整へ北シドニーの埠頭を出帆した後甲板に六頭の羊あるは、蓋し極北の氷上に獲物を打つまでの食料で、甲

板上の水槽と樽には飲料水を湛へ、船艙中幾個の水槽にも皆飲料水を湛へ、ケープ、ヨークに達するまでは何處にも寄港せざる計畫で出立した。

### ○滑稽なる土人の舟の漕方

出帆の當夜は迅雷を聞きつゝ濃霧を破つて翌日ニューファウンドランドの西岸セントジョージの絶壁を見て進むた、進むに従つて霧益々深く會々快時に會へば、恐るべき浮氷日光に映じて進むに従ひ、其數益々多く航海の難愈々加はる、ラブラドル岸の北からドミノランに至る間憂慮の間に過ぎ、ドミノランを後にして再び濃霧と浮氷との間を進み、針路を北東に取れば、浮氷は益々多く少時は浮氷絶ゆる間もなく、又濃霧の間に大艦隊の如き者が表はれた、出帆後十二日目にローズベルト號は遂にケープヨークに着いた、ペアリー少佐は直に隊を指揮して上陸し四個の天幕を張つた、少佐が探検隊を率ゐて此地に上陸して天幕を張つ

## ヘブリー氏の北極探検

たのは既に幾回かもしれない、此の上陸は前例に依りて、エスキモー土人を驅り集むる爲であつた、此頃四箇の土人此處に在つたが、十五家族の土人は東方に在りしと聞き、少佐は必ず連れ行かむと思ひ、幸に彼等の中に少佐が前回の探検に従ひ行きしものあるを以て、四個の土人には乗船の用意を命じ置いて、ローズベルト號に引き返し、號は氷塊相重なる絶壁に沿ふて、岬の東側に馳せメルビル灣の東方に入り、やがて岸に近かすかむとする時、岸上の天幕から船の姿を認め、土人は、例の土人舟を漕ぎ出して來た、彼等の土人舟を漕ぐ姿は野鴨の走る如く、其の相並んで漕ぎ來る土人の中には、嘗て少佐と行を共にして極北の氷雪と戦つたものもあつた。

## ○ウアル海峽に北航す

幾回かの探検に相親んで悉く少佐を信せる土人は乗組を承諾し、號は更にメテ

オライ島に行きメ島の土人を収容し、二時間を出でずしてメテオライト全島の民は彼等の犬と、彼等の財産とを悉くローズベルト號に移し、懐しき郷土を吹き荒む寒風に委して去る事となつた、次の場所にもこれと同じ様にして土人を収容し號はケーブ、ヨークを後にする事となつた、ヨークには老士人夫婦とその愛兒とが寂しき天幕の裏に残つた。

ケーブ、ヨークに寂しき老夫婦を残して、ローズベルト號が岬を廻つたのは八月八日の午後であつた、船首は北星灣に向けられ、船は漸く進むでベトウイツク氷河の邊を過ぎんとする時、海上遙かに怪しの船影を認め、夜半過ぐる頃北星灣に着ひて、先きの怪しの船影は和蘭陀の蒸汽船フオックス號なるを知つた、蓋同號は碇泊の地點を求めてケーブ、ヨーク地方を偵察したものである、此所で少佐はマルビン、ヘンソン二氏と共に副船エリツク號に轉乗しローズベルト號と別れ、

## ヘブリー氏の北極探検

## ヘブリー氏の北極探検

沿岸の土人収容及び海象獵に向ふ事となつた、ロースベルト號はエターに直航してエター以北の海上を碎氷進航すべき準備にとり掛る事と定め、エリック號は航路をホルステレホルム海峽に取りて行々海象の群を尋ねたが、此邊海面は更に氷なく海象一頭も見當らず、只サウンドル島の峭壁に鳥獵を試みて數時間を出でざるに、百三十羽を得、再び北星灣に引き返して土人収容にかゝり、此處に土人と共に三十頭の犬をも賣収しエリック號は深夜ウアル海峽に向つて北航した。

翌朝少佐等はウアル海峽に入り、船はイタブルウに向つた此地には數多の土人のあるを期待したるも、居住定めなき北極の蠻民は少佐が期待を無にして更に姿を認めない、エリック號は更にカルアナに向ひ船の岸に近くや、早くも六個の天幕張られたるを發見し直に上陸して、天幕を訪へば幕中更に土人の姿を見ない留守の土人小屋に待つこと少時で一人の少女が歸つた少女に仔細を問へば、少佐が

三年前此の部落に與へた鯨漁ボートに乗つて土人は悉くケープ、クレイブランドに出掛たと云ふ事であつた、尙少女はカンゲルトルクメオには十家族の土人が居る事を話した、例に依つて此處の土人に出發の用意を命じ置き、少佐等は直にインゲルフエルド灣に向つて船を進めた、海上には堅氷なけれども大氷山は數限りなく浮むでゐた、此等は皆インゲルフエルド灣頭のヘイルプリン及びカルピルの二大氷河から流れ來れるものである、海上を彼方此方に或は大山の如く、或は高原の如く浮べる大氷山に遮ぎられて、恐る／＼船を氷山間近く進み、此の狭き危険な航路を辿る中に氷山もし兩側より壓し來れば、小船エリックは忽ち粉碎せざるを得ない、危機實に一髪の間にあつた。

恐るべき氷山は船の漸くカンゲルトルクメオに近づくに従ひ尠くなになりゆき、聽て其地に着き三年前の馴染の土人を収容しエリック號は八月十一日午前二

ヘアリー氏の北極探検

時過再び氷山に包まれた灣内に進み下りた、極北の夏の真夜中の海上程崇巖なものはない、灣内一帯恰も鏡の如く清澄に、銀板を敷き詰めたるが如き大氷塊は形態さまじくに、或は奔馬空を行くが如く、或は荒鷲の天を翔けるが如く、虎の嘯くに似たるもの、獅の走らんとするに似たるもの、相連つてヘルブリン、トラシイ、カルピルの三大氷河と相寄り、遠く北より西の方には、ダレイアダムの二山及びシヨセフヒン、バアレイ島の峭壁空を劃し、南には馴鹿駛る荒野、此等清澄の風光に包まれ、船は氷山と氷山とを縫ふて駛る夜一夜駛せたるエリック號は、翌日の午前に海峽の北岸とヘルバルト島に挟まれた海象の群集地點に懸つた、然るに長き晴穩なる天候は遂に變じて、漸く險惡ならんとして、海象群集地點に漕ぎ付けながら天候の變化に遭つては空しく航路を急ぐの外なく、カルアナとイクルシアナにて土人を収容し、エリック號は直ちにエターに向ひ、ローズベルト號

の後を追ふた、少佐等は八月十三日エターの岸にローズベルトと會し、ローズベルト號は今や諸般の準備悉く終へて探検隊員二十名を乗せ、エスキモー人四十名を収容し、二百頭の犬、四百五十噸の石炭、其他數噸の海象肉を船底に歛め、グランドランドの北岸ケープ、サビンに向つて進まんとした、少佐等はやがて船首堅氷を碎くローズベルト號の甲板に、極北の天候觀測を行ふべく、今や觀測機を磨きつゝあると云ふ報告は明治卅八年八月十六日綠州エターにて歸航のエリック號に託したる者である。

## ○杳として音信なかりし少佐の消息

如上の報告を最後の音信として遠く極地向つた少佐は、其後杳として音信なく、ローズベルト號は如何にかせしか、少佐は猶ほ命ありやと、米國民の案じける中、春去り秋逝き翌明治卅六年の冬に入るも少佐の音信を聞く由がなかつた、

ヘアリー氏の北極探検

ヘアリー氏の北極探検

少佐を待つ人々の憂慮其極に達したる十一月二日突如として飛信は少佐の歸航を報じ、少佐はラブラドルのホベタルから書信を送り、同月二十三日ローズベルト號は探検隊員一同を乗せて、十數ヶ月以前後にしたるシドニーに入港した、少佐が明治卅五年の八月エターを出發して以來極北の一年半を如何に過ごしたか。

明治卅五年八月十六日エリック號と分れたるローズベルト號は、ヘアリー探検隊全員を乗せて、ロビンソン海峽の北門、グラランド、ランドの一角ケープ、セリダンに向つたが、航路困難で、さしも堅牢に造り上げられたローズベルト號も、幾度か船首を堅氷に破られんとし、ケープ、ラサアに着きたる時は氷のために後戻りする憂目に會つた、ケープ、サピンを後にして以來二十日目にローズベルト號は、漸くにしてケープ、セリダンに着き此處に極北の長夜を過した、されど、ケープ、セリダンニ冬籠の探検隊は、十月の一日隊の食糧として一百頭の麝牛

及び馴鹿等を得、ヘアリー少佐以下非常に悦びしに、探検隊唯一の生命と頼む樞犬十月に入りて續々斃死し、十日頃には三分の一を超ゆるに至つた、少佐は大に憂慮して種々調査を重ねた結果、樞犬斃死の原因は鯨肉の鹽漬を食はした爲めなるを知りしも、探検隊には是以外犬を養ふべき食物なく、かくて、冬籠の中に犬悉く斃るゝの恐あれば、少佐はマアビン。ヘンソン二氏を呼んで犬とエスキモを連れて、グラランド、ランドの七十哩を南下し、其處に食糧を得て冬籠するを命じた、二氏は直ちに土人と犬とを従へ南下しハゼン湖岸の凹地及びユナイテッド、ステート峽地に雪小舎を作り、食糧として麝牛、馴鹿、鯨等を求めた、此年は南風烈しく、風は海上の氷を吹いて、時に之を動かして、クリスマス後二週間ばかりローズベルト號は、この大水塊に舷の氷脚より上方を襲はんとしたる事も幾度なるを知らない、誰も知る如く極北の冬期は夜の連続である、殊に十二

ヘアリー氏の北極探検



ヘアリー氏の北極探検

月に入りて以來は滿象一黒、此の暗黒なる天地に忍び寄る氷塊、之れ實に北極探検家の最も恐るゝ危険である、されば探検員は二月の光明を待つ殆んど千秋の想がある、乾回り坤轉じ光明の二月は來た、されど極北二月の光明は温熱兩帶の月夜のそれよりも薄暗く、模糊たる微光に探検隊は打喜びて活動を始めた、二月の七日には冬の間遠く南に別れたエスキモーと犬とを連れて、マアビン、ヘンソンの二氏は隊に歸り、ローズベルト號がエター出帆の時に二百二十頭とヘアリー少佐が誇つた犬は此時僅に百二十頭を殘す計であつた。

### ○五個の分隊

數日後パートレット氏の率ゐたる一小隊は進路をグープ、ヘクラまで調査して歸り來れば、全隊はローズベルト號を後に犬橋に乗つて北進を始めた、隊はヘアリー少佐を先頭としパートレットウオルフ、マアビン、ヘンソン、クラアク、リ

アンの諸氏之に従ひ、二十一名のエスキモーと百二十頭の犬を率ゐ、全隊一先づグープヘクラに集合して五個の小隊に分割し、隊は更にグープ、ヘクラより北進すること二十哩、ポイントモツスに着くや、是より只氷上を駛り進むべく少佐は令を全隊に下し、先づ行くものをヘンソン隊の三輕橋と命じた、此日恰も二月廿八日であつた、かくて、ヘンソン氏の率ゐたる先發輕橋隊出發し、一日宛後れて五個に分れた隊はグープ、ヘクラを出發し茫々一面に連なる氷上を駛るのであるが、此の氷上穩旅行の困難は氷の浮動と非滑性の氷面とにある、極北の氷は綠州の方に向つて南進して來る、かく南進して來る氷に乗つて北進するから北に駛りながら反對に南に持ち運ばれ進行の抄取らず、剩さへ非滑性の氷は吹き荒む風に氷の表面に凸凹を生じて橋の滑走を妨げ、之に差懸れば道路修理をしながら進まざるを得ない、斯かる幾多の困難中最も恐るべきものは、氷裂けて海

ヘアリー氏の北極探検

## ペアリー氏の北極探検

面に現はる、リードである、極めて狭きものは超え進むべきも一哩二哩と大なるものは、櫓を其儘船にして渡るは非常なる危険である、探検隊は種々の危険を冒かして進むつゝ、三月六日漸く太陽を見、此時陸を去る八十哩の處に居たる少佐は大に元氣を得て猶ほ盛に進み、北緯八十四度八十八分の氷上にバートレット、ヘンソン及びクラーク三氏の隊に追及し、三個の前進隊は例のリードに進路を遮られた。

## ○恐る可きリード

少佐はリードの岸に達すると、如何にして越すべきかを協議したが、リードは日毎に擴るのみで容易に越し得る見込がない、少佐は竟にバートレット、クラークの兩小隊に必要品補填の目的を以て一度戻るべき事を命じ、己はヘンソン小隊と此處に止まり機會あらば直ちに乘じて越え渡らんと待ち構へた、されどリード

は少佐の到着より第六日目には、二哩幅に擴がつた、萬事茲に休し今は浮氷に乗じて渡るの外はない、ヘンソン、ペアリー二小隊は竟に浮氷に乗じてリードを渡る危険を冒す事とし、ヘンソン小隊は首尾よく彼岸に達し、ペアリー小隊は此岸に食糧貯藏穴を造る事と後進隊に打合せをする事務を帯びて更に一日此岸に返り翌日ヘンソン小隊の後を追ふた。

## ○運命を天に任かす

リードを越すや、北進を始め少佐は北緯八十五度十二分に於て再びヘンソン小隊に追及し、相共に濃霧中に陣營を張つた、然るに此の二小隊は不幸此處にて強風に襲はれ、進退の自由を失ひ吹き荒ぶ風は刻々に増し來り一日と續き二日と續き三日四日を経て猶ほ歇まず、加ふるに雪さへ降り降り、七日目に漸く風静まり陣營を出づれば氷は七十哩ばかり東方に浮動した、天候の變は不可抗力で如何と

## ヘンリー氏の北極探検

もする能はず、ヘンソン小隊は又も北進を始め、少佐は此處から二人のエスキモ  
ーに二臺の空糧をつけて、後進食糧給養隊に遇はん爲め後戻をさせた、後進隊  
は例のリードの岸に造くりたる食料貯藏穴より食物を運び出して、暴風の前にリ  
ードを残したる筈である、後戻りしたるエスキモは氷面の大裂目に進路を遮ら  
れて到底超へ得ざりしとして三日目に歸來した、少佐は最早後進給養を頼とする能  
はず、運命を天に任して北進に決し小隊に命じた後進給養隊との連絡を失ひ、今  
は猛然として北進し少佐は第一回の十時間進行に三十哩を駛り、第二回の四時間  
進行には先進のヘンソン小隊に追従し、少佐は此處に兩隊の食糧調査を始めし  
に、憐れむべし六組の犬の牽く橇は最早半分の食糧を残さず、寒氣と雪と氷と  
は覺悟の前なれど、食糧の缺乏と隊員の疲勞とは實に如何ともし難く、されど  
少佐を始めとして隊員は一步も退かんとせず、恰も磁石の尖端の如く只管北を指

した、氷の浮動とリードとに惱みつゝ進みし隊は四月の二十日に至り廣大なる露  
出海水に會ひ、氷塊と浮氷との間を幾哩進み、二十一日少佐は遂に北緯八十七度  
六分に着いて觀測した、極を距る僅に二百哩、隊員の元氣一時に昂進した、され  
ど食糧皆無一步の北進をも許さない。

## ○氷山の頂に米國旗を樹つ

少佐は氷山の頂に米國旗を樹て、更に硝子瓶中に簡單なる記録を投じ是を氷  
中に埋め、壯嚴なる感謝の祈禱を行つた、今少佐が立てる處より極に近づきたる  
ものは有史以來一人もないのである、食物の缺乏如何ともする能はず恨を吞で南  
下した、北進の時より疲れ斃れたる犬は他犬の食糧としたので、今は猶ほ死せざ  
る犬をも屠つて隊員の食糧とせざるを得ない、橇は燃料に供せられ寒さと飢とに  
抗すること二十日、隊が漸くにして綠州ケープ、マイヤの北岸に着きしは五月

## ○ペアリー氏北極発見の二報

の十二日であつた。

此處に少佐は給養隊のクラーク氏と會見した、されど給養隊は給養すべき食糧を有せず、幸に六頭の麝牛を獵りて辛ふじて飢を凌ぎ、數日の後各小隊はローズベルト號に歸つた、同號に歸るや、一週間後には更にグラントランドの未踏探検に取懸り、隊員は各自精細なる調査を遂げ世界の學界に貢献した、ローズベルト號の歸航の困難は畧し、只明治卅九年十一月二十三日を以てシドニーに着したる同號は、ペアリー少佐夫人及びその愛兒に歡迎され船中の人々は一年有餘を極地の氷雪と戦つた疲勞を一時に忘れたるもの、様であつた。

## ○ペアリー氏北極発見の二報

ペアリー少佐最近の出發は、明治四十一年七月十六日、同日セントローレン

ス灣の南門に在るケーブプレントンのシドニー港を出發し、北進してパツフィン灣に入り灣北なるユミスサウトを過ぎ、九月中旬シエリダン岬に到着した、時恰も北極附近は數ヶ月に亘る長夜の期節であつたから此處に越年し、其間各種の調査を遂げ、明治四十二年二月漸く太陽の出でんとする頃を待ち、諸種の携帶品は悉く數臺の橇に滿載し、漸く北進の運動を開始し、張り詰めた堅氷を打碎きつづ海深を測定し、其他海洋の生物等を探検して極地向ひ同年四月六日愈々極地に達したるもの、様だ、少佐の一行中には有名なる天文、氣象、海洋、生物、理學等各専門に關する學者があつて、且つ使用の船は特別の裝置ある碎氷船ローズベルト號で、無線電信、自動車等は勿論最新の各觀測器をも裝置してあつたから其觀測の十分なるは固より、古來極地附近の智識に於ては、氏が一行の右に出づるものなく、西比利亞北部未開の地にペアリーランド、ペアリーシト等の名稱あり

## ○ペアリー氏北極発見の二報